王観堂静安先生校注本「長春真人　西遊記」訳注（続き）

杉山二郎

昨年この「長春真人　西遊記」の冒頭部分を上梓刊行することができたが、以後続刊の見込みが立たなかったので次の機会を俟つことにしていた。訳注は既に完了していたのだけれど、今時蒙古時代の旅行記などに好奇の眼を向けてくれる人もなく、一部を研究機関、研究者に頒付したのだけれども、その可否の批評判定もないまま今日に到っている。吾が大学院紀要は毎歳刊行せられて、わたくしも論稿の一部を掲載せらるるに及んだが、今回この訳注の続篇を紙面の一隅を借りて再登場することにした。この旅行記の筆者李志常、ならびに長春真人邱處機、また王観堂先生について前著の前言に詳しいので識者はそれを参酌願いたい。研究紀要紙に適わしいか否か甚だ心許ないが、輓近の出版事情を鑑見ると、この種の考注文など何時陽の眼を見るか判らないので、貴重な紙面を借りることを余儀なくされたことを申し上げたいと思う。

〔本文〕乃命百騎、挽縄縣轅以上、縛輪以下、約行四程、連度五監本五作三嶺、南出山前、臨河止泊

〔訳文〕そこで従ってきた百騎に命じて動かぬ車輛の轅に縄をかけて上にひっぱり、車輪を縛って坂を下り、ほゞ行くこと四程、五嶺をこのようにして越え渡って行った。南に道をとり山を抜け出ると前に河が臨まれたので、

そこの泊りに留った。

〔王観堂先生の注記に曰く〕此の河は当さに烏倫古河に相当するものだろう。劉郁の「西使記」に謂う所の龍骨河がそれに相当する筈である。

〔本文〕従官連幕為営、因水草便以待鋪牛、駅騎数日、乃行。有詩三絶云、八月涼風爽氣清、那堪日暮碧天晴、欲吟勝槩無才思、空對金山皓月明、其二云、金山南面大河流、河曲盤桓賞素秋、秋水暮天山月上、清吟獨嘯夜水毬、其三云、金山雖大不孤高、四面長拕拽脚牢、横截大山心腹樹、干雲蔽日競呼號。

〔口訳〕一行に従って、天幕を連らねて宿営の地とした。水草があるので牛たちの餌に事欠かないので、駅馬の来るのを待った。数日たってそこで出発した。詩の三絶ができて次の様である。

八月涼風爽気清　八月の涼しい風に爽快の気分に清くひたり
那堪日暮碧天晴　日が暮れて青空が晴れ渡り何と素晴らしいではないか
欲吟勝槩無才思　この勝れた景色を詩で吟じようとして才思のないのを憾む
空対金山皓月明　仕方なしに空しく金山に月が皓々と明るのに対するのみ

其の二に吟は曰う。

金山南面大河流　金山に南に面して大河が流れている
河曲盤桓賞素秋　河はうねうねと曲りくねって秋景色を楽しむ
秋水暮天山月上　秋の水景色と暮色の天と見るに山に月が登っている
清吟独嘯夜水毬　清雅な詩を独り口ずさむと夜光る毬がある

其の三に曰う。

金山雖大不孤高　金山は大岳だけれど独り高く聳えているのではない

四面長挓拽脚牢　四周が長く棚曳いて麓は牢固としているが
横截大山心腹樹　横に大山の胸腹の樹木を切るように見える
干雲蔽日競呼号　雲が棚引いて太陽を覆う様子は競って呼号しているようだ

〔王観堂先生の注記に曰く〕耶律文正の湛然居士集巻七によると「金山を過ぐるに人の韻に和する三首」という詩文があり、

金山突兀翠霞高　アルタイ山は高く突きでて聳えそれを周達する翠色の霞が高く清げである
清賞渾如享太牢〔郎案〔諸橋漢和〕太牢祭に牛羊豕の三牲が備はることをいふ。転じて盛んな御馳走を意味する。太牢慈味を見よ（大戴禮曾子天員）諸侯之祭牛曰太牢、太夫之祭牲羊曰小牢、士之祭牲豕曰饋食（史記孔子世家）高皇帝過魯以太牢祠焉（老子二十）衆人熙熙、如享太牢、如春登台」とある〕
水のゆったりと流れる様子を清賞すると、宛かも三牲の御馳走をいただいたような気分になる

半夜穹廬伏枕臥　夜半に天幕を張ったなかで枕を置いて横臥していると
乱雲深所野猿号　雲が乱れ起った奥深い所で野生の猿が声をあげる

もう一首は

金山前畔水西流　アルタイ山の前は畔になって河水が西に向って流れている
一片晴山萬里秋　晴れ渡った空に聳える一つの山脈は萬里に渡る秋の気配を思わせ
蘿月団団上東嶂〔郎案〔諸橋漢和〕蘿月、つたかづらにかかって見える月かげのこと〔沈佺期入小室渓詩〕、相留且待蘖示熟、夕臥深山萬月春、〔李白贈嵩山焦鍊師詩〕蘿月挂朝鏡松風鳴夜弦」と見えている〕
つたかづらにかかって見える月かげが丸々と満月となり東の山間から登ってくる

翠屏高挂水晶球　松の緑からなる屏風のように高い所に水晶でできた球のように露がかかって美しい

他の一首は、

金山萬壑門声清　アルタイ山の疊々とした山並みに樹を渡る風があらそっているような響をだし、清雅な感じがする

山気空濛弄晩晴　その山の雰囲気は空漠溟濛として、晩晴をもてあそんでいるかのように見える

我愛長天漢家月　わたくしは元来長く横たわる夜空にみる漢人たちの家並みる月を愛好するのだが

照人依舊一輪月　けれどもこうしてアルタイ山の近くで見る月も、やはり旧体以然たる一片の月であることに変りないものだ

だから長春師の三首の詩も此の三つの詩韻に和して賦したことがわかるが次序は不同である

〔本文〕渡河而南、前経小山、石雑五色、其旁草木不生首尾、七十里復有二紅山、當路又三十里鹹鹵地、中有一少沙井因駐程、挹水為食、傍有青草、多為羊馬践履、宣使与鎮海議曰、此地最難行所、相公如何、則可公曰、此地原本無此二字監本補我知之久矣。同往諮師、公曰、前至白骨甸

〔口訳〕金山、（アルタイ山脈）の南面にある河を渡って南に行くと、前方に小山があって、その石は五色からなっている。その小山の傍らには草木が繁茂生育しないで、その始めから終りまで七十里にわたっている。そこを越えると二つの紅い色の山があり、その間の道程は約三十里ほどで荒蕪な塩沙漠地になる。この地域でも一個の小さな漠中に掘られた井戸があってそこで駐留し、水を汲んで食事を摂ったりしたのである。この小さな沙井戸の近傍に青い草が生えていて、その多くは放牧した羊や馬の履み歩くところとなっている。そこで成吉思汗皇帝の使と鎮海相公とが協議していうことに「此処がもっとも歩行困難な処であります。鎮海相公はどのようにしたらよいと思われますか。」とあったので、鎮海相公は「此の荒蕪な塩沙漠の地について久しい以前から知っており

ます。二人は長春師に同道しましょう」と相談した。鎮海相公は「前進しますと白骨甸があります」と云った。〔王観堂先生の注記に曰く〕雙溪醉隠集巻一に云う。戦場南の詩に注記して、白骨甸は唐代の燭龍軍の地に在り、西域僧の智全という人は漢字に博く通じていていうことに、祖父以来相伝えている白骨甸は漢代の時から此の名があったとしている。〔郎案、耶律鑄撰「雙溪醉隠集」（〝遼海叢書〟影印本、一九八五年三月遼瀋書社刊五冊本、第三冊所収）の巻二、楽府、戦城南の序文、「古来より戦場多く長城の南に在り、少長城の北に在り、茫茫たる白骨甸、如何に直ちに黄龍磧に接せんや云々」とあり、注記して「白骨甸は唐の燭龍軍の地、西僧智全者漢字に該通して云う。古老相傳えて白骨甸とするが漢代から此の名があった。李文田案ずるに唐書地理志北庭に大都護府に瀚海軍有り、本燭龍軍、長安二年（A.D. 七〇二）に置く、三年に名を更む云々と。唐書を案ずるに白骨甸の説無し、惟に葛邏禄本は突厥諸族北庭の西北、金山の西に在り、僕固振水を跨ぐ云々。僕固と白骨は音が同じで、是を智全が当てた所である云々。古老が相傳えた此の名も本く所があるわけだ。邱處機の西遊記に此の白骨甸を大沙分流の地とするが然し不當だと云っている。漢時に白骨甸の名が有るが攷えてみると白骨と僕固は音の転じたもの、唐書葛邏禄本に突厥諸部は北庭西北、金山の西に居て僕固振水を跨ぐ云々とあるのも、西僧智全の説と似るが本所があるのだろう。」とある〕

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕（武装して護衛に当った）百騎の騎兵隊は、命令が下されて縄で吾々の車輛を引き上げ、車が下におりる場合に車輪にブレーキ用の輪留めを置いた。略三駅逓に渉る地域（三日の行程におよぶ範囲の）を吾々は三つの重畳とした山脈を一つずつ越えて行った〔郎案、原文は五つの嶺を越えたとあるのを三つの山脈とするのは誤り〕。そして、そこで吾々は山の南側に到達したのだった。（今や長春一行は金山、アルタイ山を越えたのだったが）、その山の近くの河の畔りに留泊していたのだが、その地は水にも草にも恵まれた肥沃な処であった。〔注148、長春真人一行が越えて行ったという陳述から、峡谷のなかで、

その峠道が蒙古軍が通過するのに際して準備、整備した道だという。吾々は次のように結論することができよう。即ち、長春らは成吉思汗や耶律楚財らが辿ったと全く同じ道を行ったのだと。併しながら不幸なことに、この中国人の旅行記のなかに地理学的比定をするのに余りにも漠然としているものだから、彼らがアルタイ山脈の何処を横切って行ったのかを決定するのは不可能な程である。dabysten daban の狭い渓谷は、このアルタイ山脈の連鎖を越える峠道の間にあってより困難の少い道であったので、蒙古軍も吾が長春真人の一行もこの峡谷を越えて行ったらしい。その豊沃な田園が上記の本文中に注記されていて、旅行者たちが渡らなくてはならない河川が Ulan daban 峠から Bulgun 河まで下りてきたことを吾々に想像させるだろうと思われる（尚前記注5を参照のこと）〕この地で天幕が張られて、羊や馬の放牧飼養のために数日間を滞留しなくてはならなかった。（こうした休息から益を受けて）長春師は三首の詩賦を試みた。（この詩韻のなかに金山―アルタイ山の風光を読みこんだのだった。）河を渡った後に、南の方向に進み異った五色の石からなく低い丘を越えたのだった。この丘の両面には樹木花草も見られなかった。七十里の行程内で、二つの紅色に染った丘陵を見た。そして更に行くこと三十里にして、塩沙漠の真中にある清冽は井戸水のある処に泊った。そこで吾々はこの清水とともに食事の準備をした。この井戸の周りの草は十分であり、また羊や馬により踏まれているほどだった。

宣使と鎮海相公とが共に吾々のこれからの旅行について協議するところがあった。宣使は云った。「吾々はこの旅程のなかで最も困難な道筋に来ているのです。貴方のご意見をお聞かせ願いたいのですが」と。そこで鎮海相公が答えて云うのに、「わたくしは長い間これらの場処について、十分よく知っておりますよ」と。そこで長春師の処に伺候して鎮海は云った。「吾々の行手には白骨甸があります」と。

〔本文〕地皆黒石、約行二百余里、達沙陀北辺、頗有水草、更渉大沙陀百余里、東西廣袤不知其幾千里。及回紇

城方得水草、師曰、何謂白骨甸、公曰、古之戦場、凡疲兵至此、十無一還死地也、頃者乃満大勢亦敗於是。

〔王観堂先生の注記に曰く〕元朝秘史巻八によると「鼠児年に成吉思汗自から率いる軍隊が追撃攻襲を脱黒脱阿に加えて、この金山山脈に到達してここに移住して冬季を過した。明る年の春季に阿来嶺を踰えて行けば乃蠻の古出魯克はたまたま赴いて、そこで脱黒脱阿と相合流しおえた。額児的失河の、不黒都児麻の地で軍馬を整え備えていた。成吉思汗はその地に赴いて他厮殺と合流した。脱黒脱阿は乱れ飛ぶ流れ箭に当って死んだので、部下の人馬が敗走し、額児的失河を渡り逃げようとしたのだが、溺死するものは過半であって、その残余の人馬も亦皆散り散りに逃亡してしまった。此処において乃蠻古出魯克は委兀、合児魯種の部落を過ぎて回々教徒の世界に去って行った。垂河に面していた、合剌乞塔種人の古児罕と相合流しおわった」。とある。わたくしの推察するのに額児的失河と云うのは、以上の秘史の記録をもってすると、白骨甸の北方に位置するか或いは、乃蠻古出魯克が逃走して、委兀の許に至った時には白骨甸を経て行ったのみと考えられる。

〔口訳〕この白骨甸の地は全部黒石からなっております。行くことほゞ二百余里も行くと沙陀の北辺に到達するのです。この地は水草が頗る多く繁茂しております。さらに大沙陀を渉って行くこと百余里ほどなのですが、この大沙陀の広さは東西が広く広がっていて、その幾千里にも及んでいるか見当もつかない位であります。それを越えると、ウィグル（回紇）人の城に達するところで水草を得ることができます。」というた。そこで長春師は曰われた。「どうして此処を白骨甸と謂っているのですか。」と。鎮海公が答えて「古昔戦場で傷き疲れた兵士たちが此の白骨甸にくると、十の中一も死からまぬがれることもできない土地柄であります。この頃乃満の大軍勢もまた此の白骨甸で敗れたのであります。」と答えた。

〔本文〕遇天晴晝行、人馬往往困斃、惟暮起夜度可過其半、明日向午得及水草矣。少憩候哺時即行、當度沙嶺百

余、若舟行巨浪、然又明日辰巳間、得達彼城矣。夜行原作深監本改良便、但恐天氣黯黒魑魅岡兩為祟、我輩當塗血馬首以厭之。師乃笑曰。邪精妖鬼逢正人遠避、書傳所截其敦不知、道人家何憂此事。日暮遂行牛乏皆道弃之、馭以六馬、自爾不復用牛矣。初在沙陀北、南望天際若銀霞、問之本無此二字據蔵本補左右皆未詳。師曰。多是陰山翌日過沙陀。遇樵者再問之皆曰然。於是途中作詞云。高如雲気白如沙、遠望那知是眼花、漸見山嶺堆玉屑、遠観日脚射銀霞、横空一字長千里、照地連城及萬家、従古至今常不壊、吟詩寫向直南誇。

〔口訳〕天気が晴天に恵まれて昼間暑熱を冒して進んだところが、人も馬も往々疲労困憊して斃れるものが多かったので、思うのに昼間は休息して夕方から起きだして夜間に進行して、その行程の過半を経過することができたのが明らかなのです。そこで明る日の午ごろに水草のある処に達し得うだろうことになったのです。水草のある処でしばらく休憩したのち、哺〔郎案（〔諸橋漢和〕ゆふがたころのとき、七つ、午後四時〔玉篇〕、申時也〔淮南子、天文訓〕日至於悲谷、是謂哺時（宋王、女神賦）夕之後（注）善日、哺日昳時也〕とある〕夕方申の刻（午後四時ごろ）に行進してまさに沙嶺を越へようとしていたが、その流沙が造る丘陵状の高嶺が百以上もあって、あたかも船で大きな浪を越えようとするかの状態でありました。又、明日辰、巳の刻（午前八〜十時）ごろの間にオアシスの都城に達することができそうでございます。夜間の行進がおそらく便利で良いと思われますが、たゞ昼間と違って天気が真暗闇で、魑魅岡（ちみもうりょう）両どもがでてきて、吾々に祟りをなすのを恐れて、馬の頭部に血を塗り、その祟りに厭勝しようとした次第だったのです。」と答えた。ところが長春師はその所業を笑って「邪悪な妖精や悪鬼が正しい行いをする人に逢えば反って遠く避けるものである。書物がのせて人に伝へるところでは、祟りをするか避けて通るかどちらだかわからないけれども、正しい行いをする人道家はどうして魑魅魍魎を憂え恐れることがあろうか」と申された。日が暮れてから進行したのだが、牛が疲れ動かなくなったので皆道中牛を捨てゝ、騎馭するのに六疋の馬をもってした。この時

から以後また牛を利用しなかった。初めのうちは沙陀の北方にいて、南の方地平線の彼方を望むと、あたかも銀色の霞がかかっているかのように見えたので、長春師はあれは何かと問われたのだったが、左右の者たちは未だよくわからないと躊躇していると、長春師は、「多分あれは山のかげだろう」と申された。翌日になって沙陀を過ぎて、木樵（きこり）たちに出遇ったので再び問うてみると、皆「左様でございます、陰山であります。」と答えた。ここで、その道中の途中で詩作して云う。

高如雲気白如沙　高く聳えて見えるのは丁度雲の気流に湧き上がったようでその白い様子は流沙が造ったかのようである。

遠望那知是眼花

〔郎案〔諸橋漢和〕に眼花、目がすんで明かでない。〔白居易、病眼花詩〕「頭風目眩乗老衰、祇有増加豈有瘳、花登眼中独足怪、柳生肘上赤須休、大窠羅綺看纔辨、小字文書見使愁、必若不能分黒白、欲應無悔復無尤とある〕遠くを望んで見るとどれがどれやらわからず眼がかすんで明らかでないせいだろうか

漸見山嶺堆玉屑　ようやく眼がはっきりしてきて山の頂に玉の屑が堆積している様子が見えるようになった

遠観日脚射銀霞　遠く日光が照らしている様子はまさに銀色の霞を射ているように見え

横空一字長千里　その様子は空に横に一の字を描いたかのようで長さは千里にも及ぶ許（ばか）り

照地連城及萬象　その太陽光は地を照すと城が長く連っているようで、あらゆる現象が見え渡り

従古至今常不壊　昔から今にいたるまで、その様子はいつも変らず見えなくなったことはない

吟詩写向直南誇　詩を吟詠してその様子を写して南に向って誇ってみた

〔王観堂先生の注記に曰く〕湛然居士文集巻二によると、そのなかに陰山を過ぎ、人の詩韻和すにするその三首目とあり、次の詩がある

陰山雪満沙清光　陰山に雪は降り積り、沙陀に清々しい光景が眼一っぱいに現出する
凝目炫生花挿天　眼をこらしてみるとその光りに眩惑されてはっきりしないで花が天に挿ったよう
絶壁噴晴月擎海　陰山山脈の絶壁から晴れ渡った月がぽっかり出て海のよう
層巒吸翠霞松檜　山の重畳層をなした山なみは翠色を吸って、松檜が霞んで定かではない
叢中疏畎畝藤蘿　〔郎案〔諸橋漢和〕に畎畝（ケンポ）一、田のみぞとうね（韓非子、難一）歴山之農者侵畔、舜往耕焉朞年畊畝正、二、田園　都をはなれた土地、田舎（荀子成相挙舜畎畝、任之天下〔注〕畊与畎同とある〕そうした松檜のくさむらのなかに田のうねとみぞや、藤やつたかずらの類が入り混っている
深所有人家横空　その奥深い所には人家があって空に横たわっているように浮いて見える
千里雄西域江左　はるか千里にも及んで西域と揚子江左岸の地に雄飛すると、こうした名山も誇るにはあたらない

この詩韻を即席に用いたのであろう。

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕

吾々は亦沙陀（流沙の沙漠注112を参照のこと）の北辺に到達するのに二百里以上も旅行しなくてはならなかった。その地で潤沢な水草を見るであろうが併し、大沙陀（南北にわたり）長々約百里におよぶこの地を越えなくてはならない。この沙漠の他の端である南辺に回鶻城のオァシス都市がある。（注149この回鶻という文字で一般にマホメット教徒人を指すと解釈してもよいだろう。注49を参照のこと）その回鶻城でのみ吾々は再び水草を目睹するだろう」と云われた。そこで長春師はまた訊ねられ「その白骨甸という文字はどのような意味があるのですか」といわれた。それに鎮海相公は答えられて「その意味は古の戦場〝屍の野原〟の意

味であります。或る時に全軍が極度に疲労して、その地で全滅し唯一人も逃れることができなかったことがありました。今からそれ程経っていない頃にも、全く同じこの場所で及蠻(ナイマン) Nai-man の軍が大敗したと云います。(注150これは成吉思汗軍によってであり、注98を参照のこと)日中、晴天の折にこの沙漠を渡ろうとするものは誰れでも(太陽に曝されてしまい)疲労困憊して死んでしまうし、また騎乗の馬も同じであります。それでありますから、夕暮に出発いたしまして、夜中に旅をしますと翌日の昼ごろに水草のある処に達することができましょう。」と答えた。

僅かの間休憩をした後、午後になって出発した。吾々の行手には百以上にものぼる大きな砂丘をみたが、それは丁度大きな浪のまったゞなかにある巨きな船を漕ぎゆくように思われた程である。次の日、朝の八〜十時の間に(辰、巳の刻の間)一つの町に到着した。吾々は夜中旅行してきたので、それ程疲労していなかった。唯吾々は暗黒の闇のなか魑魅罔両らに見魅られることを怖れていたのである。その祟り、魅了されることを防ぐために、吾々の馬の頭のところに血を塗ったのだった。長春師はこうした処置を見た時に、嗤ってそして云ったものである。「魑魅魍魎は行い正しい人に遭った時には何の障害もなさぬものである」と。「というのは、道教文献のなかにもそれは言及、記述されている。だからこうした考え方に習熟している道家の人たちは何ら憂えたりはしないものなのだ」とも申された。

夕暮方に吾々は再び出発したが、疲憊し切った牛たち全てを道筋の彼方に置き去りにしたので、六疋の馬と全車輌につけて出発したので、これ以後、更に多くの牛を利用しなかった。(注151この長春真人の「西遊記」にみられる上記の記述は、アルタイ山脈と天山山脈との間に拡がっている苛酷な荒蕪に満ちた沙漠で、孤独を強いられる様子を描写している。しかも此の地は西方において、ズンガリ山脈と境を接している。過去十年の間、野生馬や野生の駱駝にとってのみ生存できるこれら無人の荒野は、その故に亦探険家プルジュワル

スキーがズンガリ沙漠の名で呼んでもいるのだが、ロシア系の旅行者たちによりいろいろな方向に繰り返えし旅行せられていたのだった。Sosnowsky ソスノヴスキー大尉とその一行の旅行は、中国からの帰還の途次、一八七五年の九月に Zaisan というロシア側の軍事基地と Ku chéng の都市を越えるに当ってこの地を横断したのだった。この探険紀行をした連中はこうした横断の間に殆んど絶滅に頻した程だった。こうした災害はこの地では珍しいことでなかったのである。これについては Piassetsky ピアッセスキー博士の「中国紀行」第二巻四八三頁以下の記述を参照のこと―一八七七年の十月から十二月にかけてプルジェワルスキーは全く同じ道筋を辿って、ロシアの軍事基地ザイサンから Ku chéng 迄の往復を試みたことがある。そして一八七九年の春に、大胆不適な恐れを知らぬ旅行家が再び同じ沙漠を横断し Ulungur（Kizilbash）ウルングル湖から Urungu ウルング河と Bulgun ブルグン河とを遡って、そしてそこで南に方向を変えて Barkul に迄赴いたのだった。このことについては彼の著書「西蔵」二十一頁以下を参照のこと―一方ポターニン（Potanin）は Kobdo コブドから Barkul バルクル迄の旅行で一八七七年にハミからウリアッスタイ Uliassutai にも及んだのだが、この沙漠の最も東側の狭い部分を横断しなければならなかったという。彼の著書「蒙古」第一巻、一四五、一八一頁の各々を参照のこと―ポターニンは亦（同書第一巻、一二四頁以下の処でも）一八七七年にコブトから、ウラン・タバンとブルグン河を越えて Ku chéng 迄、ロシアの交易商人たちからなる隊商の二つの紀行のあったことに触れている。

このズンガリ沙漠はプルジェワルスキーや他の旅行者たちによって（一八〇〇フィートから二五〇〇フィートの）高く聳えた荒野として記載されている。またその大部分が水に見離された、或る所は流沙に覆われた処と記しているし、また他の所では小石が厚く覆っている所だとも云っている。ポターニンが注目しているように（「蒙古」第一巻一四六頁）この礫の沙漠は黒い色を呈していて、そのために、この沙漠に陰欝な印

象を与える。だから、この沙漠を覆うのに黒色の石が厚くなっているとする中国側のこの陳述とを比較してみるがよい—事実、ピアセッスキーはこの沙漠のなかに砂丘があり（中国文献の長春「西遊記」のなかの「沙陀」という表現、これについては注112を参照のこと）彼は此処でも海の波浪に比較している。また実際「西遊記」のなかで似たような比較をしているのである—前掲の「当に沙嶺を渡って行くこと百余々処、舟で海を行くのに巨浪に出逢っているようなものだ」云々—前述したロシアの隊商はKu chéngに到達する前に、砂丘からなる沙漠と南北に拡がること八〇バァウの沙漠を越えなくてはならなかったのである。

長春真人によってズンガリ沙漠を越えていったその実際の路線を決定するのは不可能だけれども、吾々は彼の案内人がより短いと同じに、またより危険のすくない道筋を選んでいたことも充分に推察せられよう。すなわちブルグン河ないしウルング河から現在Ku chéngとBulun tokhoiすなわちウルング河を結ぶ車馬の行ける道が開けている）

吾々がこの大沙漠の北辺に依然としている間に、南の方の地平線に銀色の霞みのように、朝の日の出を思わせる何物かの横臥っているのを観察した。そこで扈従の人たちに訊ねてみたところ誰れもそれが何であるかを知らぬのであった。そこで長春師は云うた「きっと陰山山脈の一部であるに違いない」と。（注152この陰山というのは天山のことであろう。注4を参照のこと。この巨大な山脈の鎖はこのズンガリ沙漠から二百ヴァーツ離れた距離からも見ることが出来たのである。ピアセッスキーの前掲書、第二巻、四九〇頁、プルゼワルスキー「西蔵」四五頁を夫々参照のこと）この沙漠を横断した後に、その翌日、吾々は数人の木樵たちに出逢った。そこで彼らに訊ねてみた。すると彼ら木樵たちは長春師の云うた陰山であることを確証したのだった。（即案、原文「西遊記」にはこの後詩作の例文があるのであるが、ブレッドシュナイダー氏はそれを省

略してしまっている。）

〔本文〕八月二十七日抵陰山、後回紇郊迎至小城北（本無北字、據蔵本補）、酋長設葡萄酒・及名果・大餅・渾葱裂・波斯布

〔口訳〕八月二十七日に遂に陰山に到達した。後にウィグル城の郊外で出迎えの人びとが小城の北の処にやってきた。このウィグル部の酋長は土地産の葡萄酒や名高い木の実、大きな烝餅、渾葱裂（にごった葱色の布裂）とペルシア産の布を準備していた。

〔王観堂先生の注記に曰く〕これら渾葱裂・波斯布については、以下に出てくる文章中の禿鹿麻の処の注記文中に詳しい。

〔本文〕人一尺、乃言曰、此陰山前三百里和州也。其地大熱、蒲萄至夥

〔訳文〕人びとに一尺ずつの布を贈った。そこで言うことに、「この陰山山脈の前にひろがる三百里の所にあるのが和州であります」。と、聞く所によると、その和州の地は暑熱が甚だしくて、それで蒲萄もいたって夥しく獲れる由。〔郎案、岩村忍氏訳「長春真人。西遊記（世界ノンフィクション全集19の注に「和州唐代の高昌、明史西城伝に火州に作る、トルファンの東方とある）

〔郎案　馮承鈞原編陸峻嶺増訂「西域地名」中華書局刊によれば「Qoco」作 Khoco この二つの地名はいずれもドイツ人が吐魯番トルファンで得た突厥文からなる写本にも見えている。ペリオ教授はこれを考訂して、高昌の対音だとしている。その指している土地はこのトルファン県に属するところの哈剌和卓（からほうじゃ）城（Kara-khoja）となし、また亦都護城（Idikut-sahri）だとも云っている。その地の俗称は Dakianus Shabri であって、漢代の高昌壁、唐代は高昌県、宋元時代には高昌回紇国都ともいっている処に当る。「遼史」によると和州回鶻として記載され「元史」高昌国王、また都護といっているのも、恐らくは此国を指すのだろと思われる。「金史」や「西遊記」（長春真人）のなかにもこの地を訛訳して和州といっている。「元史」にはまた

哈剌火者、哈剌霍州、哈剌火州、合剌未州、合剌和州、火州の諸訳がある。「高昌僰氏家傳には次のように云っている。即ち「高昌は今の哈剌和綽である」と、「明史」は次のように云う、「火州亦の名は哈剌・吐魯番の東三十里の所、その東に荒廃した城跡あり、これが即ち高昌國郡の址である」と云う、「西域圖志」に哈剌和綽城と云っているが、皆いずれもその地を指している。別にまた一の哈剌和卓の地名があるが、それは今烏什県に属している所である。」と。これらの考証記事を見ると王静安先生の考注文と殆んど同じであるが、その出典は「西域地名」が逐一挙げてあり便利である。〕

〔王観堂先生の注記に曰く〕

耶律文正の「西遊録」によると、別石把の南五百里の所に和州と呼ぶ処があると云っている。これが即ち唐時代の高昌であって、「明史」にも西域伝に火州と出ていて位置は柳城の西七十里、土魯番の東三十里の処にある。これが即ち漢代の車師、前王の地に当り、隋の時代に高昌国と云っており、宋の時代には回鶻がこの地に居住し、元の時に火州と名付けた所でもあった。

〔○郎案　此処に「通典」に載するところの高昌車師の記事を抄記すべし

〔「通典」巻一百九十一、辺防七〕車師、高昌付「車師、前王後王並漢時通焉。前王国一曰、前部理交河城、今交河郡水分流繞城下、故為號、去長安八千一百里、戸千五百、西南至都護理所、千八百里、西域長史及戊巳校尉、並理於此、去燉煌十三日行其地。東西三百里、南北五百里、四面多大山、後王国理務塗谷即今諸城北庭府蒲類県也去長安八千九百里、戸六百、西南至都護理所一千二百三十余里、北与匈奴地接、初漢武帝征和四年中、遣重合侯馬通、将諸国之兵、其圍車師焉。車師王乃降服、昭帝時、匈奴復使四千騎圍車師、及其王烏貴与匈奴結親、遂教之邊漢道通。烏孫者、宣帝地節二年、遣侍郎鄭吉、校尉司馬憙音許更反、将免刑罪人。田渠犁積穀、欲以攻車師、至秋収穀、吉憙発城郭、諸国兵其撃車師、攻交河城破之。王尚在北石城中、未得會吉食盡帰、渠犁田秋

収後、更往攻石城、王乃軽騎奔烏孫焉。吉遷田渠犁、及車師益積穀以安西国侵匈奴、匈奴大臣皆曰、車師地肥美近匈奴、使漢得之多田積穀、必害我国不可不争也。遣騎来撃、吉吉将田士卒保車師城。匈奴圍城数日、乃解吉上書、車師去渠犁千余里、間以山河、北辺匈奴、漢兵在渠犁者勢不能相救、願益田卒、於是召故車師太子軍宿、在焉耆者立以為王、盡従車師国人、今居渠犁、遂以車師故地与匈奴、車師王得近、漢田官与匈奴絶、亦安楽親漢、其後置戊巳校尉屯田車師故地（即今交河和漢奴之以置校尉）、平帝元始中、車師後王国有新道出五船、北通玉門關往来、差近戊巳校尉徐晋、欲開以省道里、避白龍堆之阨、車師後王姑句（音釣）以道當為柱置心不便也。（如支柱也、言有処置立亦支柱於巳故心不便也、柱音竹禹反）地又頗与匈奴南将軍地接、其後挙国降匈奴（盡挙一国之軍）。是時王奔易、匈奴単于璽、単于怒大撃北辺、而西域亦瓦解、焉耆国近匈奴、先叛殺都護、桓欽莽不能討、西域因絶、至後漢和帝元光二年、大将軍竇憲、破北匈奴車師震慴（之涉反）、前後王各遣子入侍、其後屢叛、至安帝延光四年、長史班勇撃其後王軍大破斬之。桓帝永興初、後部王阿羅多攻圍漢田屯且固城殺傷吏士、後部侯炭遮領餘人叛阿羅多、詣漢降、阿羅多従百余騎亡走北匈奴、中漢立後部故王軍就質子、車君為後部王、阿羅多復従匈奴中来降、於是更立阿羅多為王、将卑君還燉煌、以後部人三百帳別属役之（食其税帳者猶中国戸之故）、至魏帝時賜其王壹多羅、守魏侍中號大都尉、晉以交河城為高昌郡（蓋因其地高敞昌盛立名、或云昔漢武帝遣兵西征、師旅頓弊者因住焉、有漢時高昌壘故也）張軌呂光、沮渠蒙遜在河西、皆置太守以統之焉。後魏太武帝時、其前都王為沮渠務緯所攻、遣使上表云、不能自全、遂捨国東奔、三分免一在、焉耆東界、幸垂矜救魏使撫慰、開焉耆倉給之。文成帝末、其地又為蠕蠕所并、立闕伯周為王、高昌麴嘉宇霊鳳、金城郡楡中人、（今鄯地）既立為王、會焉耆為嚈噠所破、衆不能自立、請主於嘉嘉、遣其第二子為焉耆王、由是始大益、為国人所服、其都城周廻千八百四十歩、於坐室畫、魯哀公問政於孔子之像、国内有城十八、置四十六鎮官、有合尹有交河公、田北公、皆其王子也。余官多同中国、大事決之於王、小事則太子及二公、隨状断、平章録記事訖、即除籍書之外、無久掌文案官人、雖有列位並無曹府、唯毎朝集於衙門、評議衆事、諸城各有戸曹、水

曹、田曹、每城遣司馬侍郎相監検校、名為城令、服飾丈夫従胡法、婦女人略同華夏、兵器有弓箭刀楯甲矟、文字亦同華夏、兼用胡書、有毛詩論語孝経歴代子史集、学官子弟以相教授、雖習読之而皆為詩賦、税則計田輸銀、無者輸麻布、其刑法風俗婚姻喪葬与華夏大同、其人面貌類高麗、辨髪施之於背、女子頭髪辨而垂。其地高燥多石磧、気候温暖与益州相似、穀麥再熟、宜蠶、多五果、有草名為羊刺、其上生蜜而味甚佳、赤塩加朱白塩如玉、多葡萄酒、俗事天神、兼信仏法、国中羊馬牧於隠僻以避外寇、非貴人不知其所。又有草実如繭中絲如細纑、名為白畳子、国人取織以為布焉。其国北有赤石山、山北七十里有貧汗山、夏有積雪、此山之北鉄勒界也。従武威西北有捷路、渡沙磧一千余里、四面茫然無有蹊、欲往者不可準記、唯以人畜骸骨及駝糞為験、沙中或聞歌哭之声、行人尋之多到亡失、蓋魑魅魍魎也。故商旅往来多取伊吾路、孝明帝正光中、嘉遣使求借五経諸史、并請國子助教劉変以為博士。及隋文帝開皇中、突厥破其四城、有二千人来帰中国、嘉孫伯雅立其大母、本突厥可汗女、其父死突厥令依其俗、伯雅不從者久之、突厥逼之不得已而從。煬帝大業五年伯雅来朝、因從擊高麗還、尚宗女華容公主、八年帰蕃。至大唐武徳中、遣使献狗雌雄各一、高六寸長尺餘性甚惠能、牽馬衡燭、云本生佛菻國、其後不依職貢。貞観四年其王文泰来朝伯雅子、後與四突厥連結、諸朝貢者皆路出高昌、文泰稍擁絶之。至十三年太宗謂其使曰、高昌數年来朝貢脱略、我使人至彼、文泰云、鷹飛於天、雉鼠于蒿、猫遊於堂、鼠安於穴、各得其所、豈不快耶、明年當発兵以擊汝国。十四年八月交河道行軍大総管、侯君集平高昌國下其郡三県五城三十二、戸八千四十六、口萬七千七百三十四、馬千三百疋、太宗以其地為西州、以交河城為交河県、始昌城為天山県、田北城為柳中県、東鎮城為蒲昌県、高昌城為高昌県。初西突厥遣其葉護屯兵於可汗浮圖城、與高昌為影響、至是懼而来降、以其地為庭州并置蒲類県、每歳調内地更発千人鎮遏焉。黄門侍郎褚遂良上疏曰、臣聞古者哲后必先華夏、而後戎狄務廣徳化、不事遐荒、是以周宣薄伐至境而止。始皇遠塞中国分離、漢武負文景之聚財翫士馬之余力始通西域、将三十年復得天馬於宛域、采蒲萄於安息、

而海内空竭生人物故、所以祖至六畜、算至舟車、因之年凶盗賊並起、捜粟都尉桑弘羊復希主意、請遣士卒遠田、輪台築城以威西域。武帝翻然追悔、弃輪台之野、下哀痛之詔、人神感悦海内、又康向使不然生霊盡矣。是以光武中与不踰葱嶺、孝章即位都護来帰、今誅滅高昌城威加西域、牧其鯨鯢以為州県、然則王師初発之歳、河西供役之年、飛芻輓粟十室九空數郡肅然。五年不復陛下、歳遣千余人遠屯事戍終年離別、萬里思帰去者、資装自須営辨、既賣我菽領其機杼経途死亡、復在言外、兼遣罪人増其防遏、彼罪人者生於敗肆。終於惰業犯禁違、公必能擾於辺城、無益於行障所遣之内、復逃亡官司捕捉、為生事設令張掖塵飛、酒泉烽挙、豈能得高昌一人斗粟、而及事乎、終須起発隴右諸州、星絶電撃由斯而言、此河西者方巳腹心、彼高昌者他人手足、豈得廙費中華以事無用、書曰不作無益害有益此之謂也。陛下平頡利以沙塞、滅吐渾於西域、突厥余衆詐為可汗、吐渾隨崩更樹君長、復立高昌、非無前例、此所謂有罪而誅之。既服而立之、四海百蛮誰不見聞、蠕動懐生長威萬徳、宜択高昌可立者而立之。徴給首領兼還本、負戴漢恩長為藩翰、中不擾既富且寧傳之子孫、以貽永代矣不従。」〔郎案口訳すべきだが、繁冗の惶れあるを以って句点のみ〕

〔本文〕翌日沿川西行歴二小城

〔口訳〕翌日川に沿って西の方に向い小城二ヶ処を経て進んだ。

〔王観堂先生の注記に曰く〕

此の記録を読むと陰山山脈に到達した後に、鼈思大城の東に三つの小城があったことになる。「元和郡縣志」を勘案して庭州の條下に「郝遮鎮は蒲類縣の東北四十里の所にあり廻鶻路（ウイグルろ）に面している。鹽泉鎮は蒲類線の東北二百里の所で廻鶻路に面している。特羅堡子は蒲類縣の東北二百里にあって、四面に河原の小石をもって堡塁を置き周囲が約二十里あり、水草の生えた好い場所で、廻鶻路の東の道に住き着く所云々」〔郎案、余が架蔵する「元和郡縣志」は唐李吉甫撰「元和郡縣圖志」で序二篇、目録一篇、志四十巻、原闕六巻宋人跋付、闕巻逸文、

補目録周跋附、孔跋一篇、補志六巻、からなる金陵書局校刊、光緒六季（AD.一八八〇年）工竣本で、六冊一帙である。王観堂先生引抄する文章は巻第四十隴石道下の庭州で十三紙裏から一四紙裏にある。」長春真人の行程道路を考えてみるのに、正唐の時代には回鶻を経由して庭州に赴くの道路があり、そこで「西遊記」中の記録に見える小城三つが、まさに「元和志」が云っている所の一堡二鎮に相当する筈である。元史を翻くと哈剌亦哈赤北魯伝に哈剌亦哈赤北魯、帝に従って西方に征戦し、別失八里に到達した、東獨山に城塞を見出したものの、守備兵は居なかった。ところが帝はこの城塞は何という名かと問われたので、答えて言上し、「独山城と申すのであります。往年大饑饉がおこって附近の住民が、荒蕪地から皆流亡逃散してしまったことがありました。ところが此の城のある独山城は、丁度北からやってくる道の要衝に当り、しかも小麥を種え耕作するのに便宜のある所で、防備に格好の所でありました。臣（わたくし）が昔唆里迷国にいた時に、その戸の六十世帯が此の独山城に移植したいと願い出た。といったことがあります。」と申し上げた。帝の曰われることに「その子の月朶矢野訥に金製の護照符を帯びさせて派遣し、往きてこの城を取らせ、父子ともに皆その城に留居させたがよろしかろう」とあった。その後六年程経て、太祖がまた西征して、還りにこの城の様子を見たところが、野原を開墾し、こゝにやってきた民は物資にも豊かに恵まれて繁営していた。哈剌亦哈赤北魯の安否を訊ねたところ、すでに死歿していたのであった。そこで子の日朶矢野訥に都監督の印章を賜わり、独山城を兼治させた。達魯花赤はそこで考えてみると、この「元和志」に云う三つの小城の一つであったに違いない。元時代の名称は独山城であった筈である。〔郎案百衲本「元史」巻百二十四、列傳第十六哈剌亦哈赤北魯伝傳四紙裏五紙表〕

〔本文〕皆有居人、時禾麦初熟、皆頼泉水澆濯得有、秋少雨故也。西即鼈思馬大城

〔口訳〕これらの二小城に夫々皆人が居住してゐた。時候は、稲や麦が熟して収穫があった。これらは皆、泉水が湧いて豊富に潅漑ができたからであったし、また秋季に僅かしか雨が降らなかったからでもあった。西方の方

向に赴けばすぐに鼈思馬大城に到達する。

〔王観堂先生の注記に曰く〕「元史」の地理志、西北地附録によると別失八里とあり〔郎案「元史」巻六十三、志第十五、地理六の「西北地附録、二十三紙下」のなかに「額爾巴拉（原作亦剌八里）（中略）諸王海都行営于阿里馮圖等處、蓋其分地也。自上都西北行六千里、至回鶻五城、唐號北庭、置都護府、又西北行四、五千里、至阿里馮圖。至元五年海都叛挙兵南来、世祖逆敗之于北庭云々…」とあり〕耶律楚材の「西遊録」に金山（アルタイ山）の南に回鶻城があり、その名前は別石把といっている〔郎案、余が架減する湛然居士、従源著の「西遊録」は昭和二年、神田喜一郎先生の宮内省圖書寮の鈔本で一紙裏は見える〕「雙渓酔隠集」巻五に庭州詩の李文田注記があって「庭州は北庭都護府のことであると云っている。〔郎案、「雙溪醉隱集」巻五、七言絶句、庭州、注、「文田案ずるに、元史、地理志、西北地付録に阿里麻里自上都西北行六千里、至廻鶻五城、唐號北庭都護府」とある。〕輪臺隷焉は後漢における車師後王を指している〔郎案：此処に馮承鈞原著「陸峻嶺増訂、西域地名」Beshbalik の條項を引用する。「唐為金満城、置北庭都護府及瀚海軍於此、舊唐書地理志云〝後漢車師後王庭、胡故庭有五城、俗号五城之地〟「西遊録」作別石把、「西遊記」作鼈思馬、歐陽玄〝高昌偰氏家伝〟云〝北庭者今別失八里城〟「元史」多作別失八里。〝綦公直伝〟作別十八里、〝李進伝〟作別石八里、〝脱烈海牙伝〟作別失拔里、〝明安伝〟作別失八剌哈思、八哈思、蒙古語義為城、與八里同義、亦即別失八里也。「明史」亦作別失八里、突厥語五為bes-h、城為balik、其地今在新疆濟木薩爾（舊称乎遠）県治北、後堡子北之破城子、可参照Jimasa條。又高麗北別有一、別失八里、〝輟耕録〟所謂〝高麗以北名別失八里、訳言連五城〟者是已」とあり〕車師後王故庭に五城があって一般に五城の地と云っている。現在の其の俗名は之を伯什巴里と云っているが、蓋し、突厥語 Beshbalik に宛てられるだろう。伯什は中国語に訳すと五の数を意味する、巴里は中国語で城である。欧陽玄の「高昌偰氏傳」の北庭は今の別失八城で、此は鼈思馬、すなわち別失八里であり、別石把は伯什巴里の異譯である

〔郎案：「輟耕録、巻第八、狗站」の條に、憑承釣先生引用するところの章句あり、即ち「高麗、北名別十八を以ってする、中国語で言う五連城の意味である。罪人のなかで流刑囚奴児干は必ず、この北別十八を経て行かなくてはならない。其の地は極寒であり、海も亦凍結する。八月から初まり明年の四・五月迄凍結し丁度このころ融解する。だから行人はその氷の上を進行するのに平地を歩いているようだと云う。征東行省は毎歳官吏に委せて奴児干がこの地にやってくると、囚人の糧粎を給すると云う。この所は站車を使用するのであるが、その車を四疋の狗が挽くのであるが、狗たちは全て人間の話す言葉を諳じていて、站車に夫々狗が分れて牽くのが例となっているが、若し、人がいじめて死なせ、四疋の数が減少したりすると、必ずその主人を噛んで死に至らせてしまう由。」〕

〔本文〕王官士庶道僧数百、具威儀遠迎、僧皆赭衣、道士衣冠与中国特異。泊於城西蒲萄園之上閣、時回紇王部族供（藍本作勧）蒲萄酒

〔口訳〕王族官吏、武人や庶民、僧侶、道士にいたる迄数百人の人たちが、夫々威儀を正して遠く郊外にまで出迎えてくれた。僧侶たちの威儀は皆赤い衲衣を着ていたし、道士たちの衣冠も中国の風俗と特に異っているのがみられた。城の西にある蒲萄園の堂上二階に宿泊した。参台した時に回紇王の部族が蒲萄酒を供餐してくれた。

〔王観堂先生の注記に曰く〕その当時の畏兀（ウイグル）児王、また都護の巴而木阿而忒的斤らが、太祖に従って西域征伐に赴いていたので、丁度そのために止住して部族の中にいたらしい。

〔本文〕供以異花雑果名香、且列侏儒伎楽、皆中州人、士庶益敬侍、坐者有僧道儒、因問風俗、乃曰、此大唐時北庭端府

〔口訳〕供應してくれるのに珍らしい花や、いろいろの木の実、名香の類があった。且つ、侏儒（こびと）の舞楽や伎楽を列席させて演奏してくれたが、皆これらの楽人は中国からの人たちばかりであった。武人たちも大衆庶民も、ま

すます敬重供養してくれたし、列席するものに僧侶、道士、儒者があった。そこで此の地の風俗の渕源を質問すると、此れらの地は大唐の時、北庭都端府に属していたのでとのことだった。

〔応観堂先生の注記に曰く〕徐星伯の言によれば「端府というのは都護府に宛てる音声だ」と。〔郎案・徐星伯は清朝考証学者徐松で彼の「西域水道記」巻三の庭州金満縣の條を検するに、北庭都護治也とあるも「北庭端府」の言見えず。未詳〕

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕

八月廿七日、すなわち一二二一年の九月十四日に当る日に、吾々は陰山山脈の北側に到達した。そこには小さな町があって（元史の鎮海伝には、回紇人の町と云っている）その回紇人たちが長春師に逢いにやって来た。そして町の主だった人たちは果実やらペルシアの麻の裂地（波斯布）などを貢物としてもたらしてくれた。その町の酋長は、陰山の南の側三百里離れた距離の処に和州の町があると語ってくれた。（注153、この和州について本文注記の13と、本文16頁を比較参照のこと。その和州こそペルシアの年代記作者のいうKarakhodjo である。一八七九年にA. Regel レーゲル博士がこの都市の巨大に拡がる遺跡を訪問したが、それはトルファン高昌城の東方四〇ヴァーストの処に位置していたと云う。Peterm. “Geogr. Mitth.” 1880, p. 207と地図18を参照のこと）その地は非常な暑熱に見舞はれ、その地は葡萄の豊饒の故に有名な所でもあった由。（注154、Regel レーゲル博士の前掲書二〇四頁でも、トルファンの素晴しい葡萄について注記している）翌日、吾々は河に沿って西方に進んだ。そして二ヶ処の小さな町を経由した。この時は九月の中旬だったのだが、小麦が穂をつけ始めたところであった。この地は山から導かれた泉水で人工的にうまく潅漑されていた、というのも此の地に雨は稀れであったから。

さらに西に向って旅してゆくと、吾々は鼈思馬と呼ばれる大きな都会に到達したのだった。（注155この鼈思

馬は Bishbalik を意味する宛字であろう。さらに注157を参照のこと〔郎案：此処に注157を訳し引用し置くべし「北庭は中国語で北方にある宮庭の意味である。七世紀において〈唐代に当るのだが〉この地は突厥人（トルコ人）の居住地の一つであった。この突厥人たちが中国人に服属した後、北庭はA.D.七〇二年（武則天、長安二年）都護府の所在地となった。わたくしは何故に上記の本文に端府とあるのか説明することはできない。A.D.九八一年（宋、太平興国六年）に Wang yen〔王衍〕がこのウィグル国を訪問した時に、北庭はウィグル人の手中に陥ちていた。成吉思汗の時代には此の地は Bishbalik（即ち四つの町）と呼ばれていて、ウィグル人たちの首都であったという。Klaproth クラプロート氏はその論考 “Mém. rel, à. L'Asie” ii 355 seqq のなかで、古代のバシュバリクの位置は現在の Urumtsi ウルムチに相当していることを指摘している。〔郎案、憑承鈞の「西域地名」によれば Urumtsi の西域土地、人物、略作委魯母、〈西域圖志〉作烏魯木齊、今の新疆、烏魯木齊市」とあり〕、耶律楚材（注8を参照のこと）はこの名前をもっと正確に Bie-shi-ba（鼈思馬）と書いている。わたくしは、古代における蒙古人たちが外国語を発音するのに当って屢々bないしpにmをつけて複合化している現象を見ているつもりである。こうして、蒙古語の権威者である Rashid ラシッドは開平府の代わりに開民府と書いている。マルコ・ポーロ（ユール本、第一巻、二六頁）に Kemenfu と書いている。〔郎案、ユール本、マルコポール紀行中に上掲の頁に概当の文見出さない。未詳〕王（支配者ないしは王子）官吏、民庶、仏教徒と道士たちが長春師に遭うために郊外の遥か離れた所に迄やって来た。そして吾々は都市の西にある葡萄園に居を定めた。回紇の王の縁者たちは葡萄で醸造した酒をもたらしてくれた。（注156、此処でとくに葡萄酒と断ってあるのは、中国人の謂う酒は米から醸造しているものだからである）それに各種の果実も亦。長春師に対する帰依の様子は日毎に昂った。その集ってくる人たちの群れには仏教徒、道士、儒家たちの姿が見られたのだった。長春師はその国の風俗や国振りについて多く

の興味関心を有していた。これらの人たちは、唐時代（A.D.六一八～九〇七年）にあって、此の都市は北庭の端府であったことを吾々に語って聞せてくれた（注157、上記参照）そしてこの唐代まで頃に、唐朝によって確保された辺彊の都市が、尚依然として存在している由である。さらに記述を進めて東方に向って数百里程行くと、西涼と呼ばれる府（政治的出張所）がある。（注158全く同一の場所がその当時の西涼府であり、甘粛省に属する地方で現在の涼州府であることがわかる。併し乍ら、この地は東方に位置するのではなくてビシュバリークの南東に位置している上に、しかも可成りの距離がある。こうした西涼府をもつほかの都市について著者が云っているのか、誤謬であるかに違いない）さらに西方に向って三百里行くと、輪台と呼ばれる県域（地方都市）がある。（注159この輪台と全く同じ名前が、耶律楚材の旅行記のなかにビジュバリクの西方二百里のところにあるとしている。長春真人の旅行の日記記述者と同じく、耶律の旅行記者も天山山脈の北に置いているのである。注12で見てきたように、漢代の輪台はこの天山山脈の南麓にあったと見做されていた筈と思われる。）

〔本文〕景龍三年、楊公何為大都護、有徳政諸夷心服、恵及後人於今頼之、有龍興西寺二石刻柱

〔口訳〕唐の中宗景龍三年（A.D.七〇三）楊公何が大都護の長官となった。徳のある政治を施したので、諸々の異民族が心から服従するにいたり、その恵みは後世の人たちに及んで今も之に頼っている程である。龍興西寺に二個の石柱があると云う。

〔王観堂先生の注釈に曰く〕仏説十地経の首題をみると、大唐国の僧法界が中インドからこの梵本を持参請来してコータン三蔵沙門尸羅達摩を請招して北庭府の龍興寺で訳経せしめた由がある。〔郎案、佛説十地經九卷は唐の尸羅達摩訳で、大正新修大藏經第十卷、華嚴部下、二八七、佛説十地經、五三八頁に見えている。寺本婉雅著〝于闐國史〟（大正十年六月、丁子屋書店刊）第三于闐國佛教史の研究に、十六于闐史上の佛教、十七于闐と華

厳経との關係に、八十華厳経、六十華厳経、四十華厳経の伝来を述べ、八十華厳（大方廣佛華厳経八十巻）も唐代、コータン沙門實叉難陀の訳であり、北庭龍興西寺で、佛説十地経が尸羅達摩によって訳述されたことも充分考えられる。龍興西寺についてはその具体的遺趾は確められず、唯、清の徐松（西伯）撰の「西域水道記巻三」巴爾庫勤淖爾所受水の項に、「唐爲庭州金滿縣、又改後庭北庭都護治也、元於別失八里、立北庭都元帥府、亦治於斯、故城在今保恵城北二十餘里、地曰護堡子破城、有唐金滿縣殘碑、唐造像碣」とあって、碑文の逐一を紹介しているが、龍興西寺、唐僧法界、コータン沙門尸羅達摩に触れるところがない。〕

〔本文〕功徳煥然可観、寺有仏書一蔵、唐之辺城往住尚存。其東数百里有府、曰西涼、其西三百余里有県、曰輪臺

〔口訳〕その訳経の功徳は明らかに輝いていて観るべきものがある。龍興西寺には尚仏典を蔵する一屋が残っている。唐の時代の辺疆都市、城塞で今もなお存続しているその一例である。それから東方に向って数百里程も行くと、都府があって名を西涼と云っている。その西方三百余里の所に県城があり輪臺といっている。

〔王観堂先生の注記に曰く〕「元和郡縣志」によると輪臺県は庭州の西四十二里の所にあると云っており〔郎案「元和郡縣志」巻四十「輪臺縣、東して庭州に至る四十二里」とある〕「太平寰宇記」によると〔郎案、宋、樂史撰、「太平寰宇記」二百巻、四庫全書史部地理類に所収〕輪臺県は東方に庭州より四百二十里で到することができると云っている。「元和郡縣志」と「唐書地理志」をもってすると、庭州から清海軍に向っての道里には差異があり「太平寰宇記」の場合もこの一例である。この長春師の「西遊記」では三百余里と云っているが、耶律楚材の「西遊録」では別失巴城から西方二百余程の所に、輪臺県があると云っているのでもわかるように、略大雑把に云っているのがわかるであろう。

〔本文〕師問曰、更幾時得至行在、皆曰、西南更行萬余里即是。其夜風雨作、園外有大樹復出一篇示衆云。夜宿

陰山下、陰山夜寂寥、長空雲黯黯、大樹葉蕭蕭、萬里程塗（監本作塗程）遠、三冬季候韶、全身都放下、一任斷蓬飄

〔口訳〕長春師が質問して曰うことに「これから先の旅行はどれ程の時間をかけたら皇帝の行在所に行きつくのであろうか」と。扈従する人びと皆が云うには「更に西南方向に一萬余里程行かねばなりません」と回答した。そこでこの夜風雨がひどく降った。この滞在している園庭の外に大きな樹があった。その様子を感慨詩に託して一篇を創り皆に示した。その五言律詩に曰う。

夜宿陰山下　夜、陰山山脈の麓に宿泊した
陰山夜寂寥　この陰山での夜は寂寥であって
長空雲黯黯　長夜の空に覆う西雲は暗く垂れ込め
大樹葉蕭蕭　園外にある大樹の葉も蕭々と鳴り
萬里程塗遠　これから先の萬里の行程は遥か遠い
三冬季候韶　恐らく三度越えなくてはならぬ冬の気候は厳しく
全身都放下　全身を都っての自然のまゝに放下すると
一任斷蓬飄　一度この自然に任したからには蓬が風に飄うのに似て任せよう

〔王観堂先生の注記に曰く〕「湛然居士集」の巻二をみると「陰山を過るに人の韻に和して造るその二」に、次のように唱っている。

羸馬陰山道　馬を天山山脈の道に進めると
悠然遠思遼。　景色が悠然と開けて遥かな思いに耽る
青巒雲靄靄　天山の青みがかった山並みに雲がかすんで見え
黄葉雨蕭蕭。　黄ばんだ樹の葉に雨がしめやかに降る

未可行周禮　まだ周禮の境地にも達することができないのに
誰能和舜韶。どうして吳舜の楽に和して歌うことができようか
嗟吾浮海粟　今のわたくしの境地は海中に浮ぶ粟粒のようなのに
何礙八風飄。どうして八方から吹く風に飄蕩されるのを妨げられようか

とあるが、即ちこの詩韻を利用していると思われる。

〔本文〕九月二日、西行四日、宿輪臺之東、迭屑頭目来迎、

〔口訳〕九月二日になって出発し、西の方を目指して四日の旅をしたが、輪台県の東に宿泊した。そこに迭屑の頭目〔郎案：王観堂先生の注記に曰く〕「至元辨偽録」巻三を看るに、「皇帝が諸々の師匠たちに向って宣うには「仏教と道教の両つの道は夫々お互いに相妨げない筈である。今先生は道教の部門での最高の秀才の名を謳われた。人はまた儒教部門での第一人者とも言ってもいる。しかるに迭屑となると、人は弥失訶を信奉する者と云うが、その言うところは天に生れ得て、達失蛮が叫空して天の賜物に感謝を表わすの意味があり、その詳細は思想や根本義を考えてみると、佛教と同一であると皆が批難している。」と。〔郎案、この「至元辨偽録」は大正新修大藏經第五十二巻、史傳部四所収、二一一六「辨偽録」五巻、元、道者山雲峰禪寺沙門祥邁、奉勅實録撰のことで、その巻三の末尾に近く「帝對諸師曰、我國家依著佛力光闡洪基、佛之聖旨敢不随奉、而先生毎見俺皇帝人家歸依佛法、起憎嫉心、横欲専檀自家、遏他門戸、非通論也。今先生言道門最高、秀才八言、儒門第一、迭屑人奉彌失訶、言得生天達失蠻叫空、謝天賜與、細思根本皆難與佛齊。」とあるのに依っている。〕大唐景教流行中国碑文を勘案してみるのに、その銘文中に「吾が三分の一の分身は景尊彌施訶」とある

〔郎案：此の彌施訶について、佐伯好郎著「支那基督教の研究1」中の第一篇唐宋時代の支那基督教に、この大

秦景教中国流行碑について論及するところあれば、以下、引用すべし。即ち「I、メシア（Messiah）と云ふ言葉に関しては、前述の一神論は終始一貫して「彌師訶」と云ふ漢字を宛てて居る。然るにこの序聴・迷詩所経に於いては、前述の「メシア」の対音文字が一定して居ない。（一）「迷詩訶」とすべきを誤記して「迷詩所」として居る迷詩所もあり、（二）彌師訶もあり、（三）迷師訶もある。僅かに百七十行の景教経典中に景教の本尊を表示する最も大切な言葉であるメシアに対する対音文字が区々として一定して居ない事実は、何を語って居るか。斯くの如き不統一性の表示は「彌師訶」といふ文字が終始一貫して用ひられて居る一神論の撰述に於てのみ、あり得ることであって、一神論撰述の後にはあり得べからざることである。云々…」（二四四～五頁）とあり、佐伯氏によればこれ彌施訶はメシアを指していることが明らかである。唐代の写本で「景教三威蒙度贊」があるが「應身皇子彌施訶」とあり、この彌失訶はすなわち彌施訶であり、此処に云う、迭屑人奉彌失訶（迭屑人がメサイアを奉信している）という迭屑頭目とは景教の長老を指すと考えられる。」

（ブレッドシュナイダー氏の訳注）

長春師は皇帝成吉思汗が当時居た行在所迄の距離を、どの位見計って考えられるかを訊ねた。それに対して皆の意見ではその見積もりでは、一万里さらに南西方向にあるとして一致したのであった。

九月二日、（実は吾が暦では九月十九日に当る）吾々は再び出発して、西方に向って四日の羈旅の後に、輪台県城の東に宿泊した。（注159、この輪壹と同じ場所が、耶律楚材の旅行記「西遊録」のなかにビシュバリー（別石杷）城の西二百餘里にあると陳述している。この著者は長春眞人の旅行の日記筆者と同じように、この輪壹を天山山脈の北に置いている。注12で看てきたように、漢代の輪壹はこれら天山山脈の南と見做されていた筈出ある。）そこに、迭屑の長老が吾々に逢いにやって来た。（注記160、パラッディウスの「中国におけるキリスト教の古代の足迹を辿る」Palladius（〝Ancient Traces of Christianity in China" Russ. Orient.

Record, i pp.25〜63）によると、この迭屑はササン朝時代以後、キリスト教徒を表示するために用いられた tersa といった言葉の中国音訳である。そして時には拝火教徒やマギーらを表示するためにも用いられていた言葉である。〔郎案：此の Tersa→Terza→Tarza といった言葉に就いて、A.E. Moule; Christians in China, before the year 1550, Rep. by Taipei 1972, の序説に「現在まで彼らキリスト教徒についての知見から、吾々に理解を邪またげてきたものは、彼らがキリスト教徒の名前で呼ばれているのではなくて、Terza テルザの民と呼ばれていることに由来する。そのテルザの意味は、中国にやって来たその出身国の名前であるように思われ、使徒の宗教つまりは十人からなるという意味の宗教を指していた。だから中国語で書き現わす場合に、十といって完全な十字架になっている。というのも、外見上や像、それも偶像といったものではなく、モール人やユダヤ人のような者たちを示すが、唯彼らが豚や全ての獣肉を噉（くら）った事実によってのみ区別され、十字架を手で覆う形式図像が表現されている」（七頁）。尚亦「Terza は tarsā と同じであり、この語彙はマホメット教徒により、キリスト教徒ないしは非回教徒に宛てたもので、実際に国際的な名前ではなく、一方において中国人たちは、キリスト教徒（yeh-li-k'e-wên（也里可温））と回回（イスラーム教）いずれも国際的な表示として用いているのに対して、他の語彙に関联しているように思われる」（10頁注11）。さらに「怛索（Tarzā）の間では、浄戒を守っているが、こうした美点長所については未だ聞いたことがないのである。と云うものの、白衣をまとう高潔な長老たちの間に、吾々は現在でもこうしたタルサを見るのである。（注39、この論は p．ペリオの〝通報〟一九一四年版の六二五頁、六二六頁の論文を基礎にしている。そこではペリオ氏が次のような注記を加えている。即ち〝狭い意味での Tarsā は、クエーカー教徒〟の rāhib の僧を指している。亦 Yazdbozed はシリア文経典では部派の名を指して、僧侶を指しているのではない。つまりはそうした教会世界のなかに生きそして聖職を遂行する人なのである。彼は俗人の聖職者、すな

わち〝白衣の聖職〟と呼ばれていると。さらにペリオはこの〝白衣の聖職者は黒衣の聖職者〟に対立するものとして、東方教会に属して、白衣を着た俗人とは混同されてはならない点を指摘している。この区別は上記の注34に引用したエイテルの言葉のもつ見解を明らかに心に留めておく必要があろう。また結婚していても I-ssŭ は僧侶として記述され、hashāya とされている。」（45頁）加えて注記29に「Tarsā という言葉はキリスト教徒を主として指示しているペルシア語であるように思われ、また他の宗教に属する人びとをも指していたらしい。そこで tarsica lingua は「偶像崇拝者の言葉」すなわち蒙古人を意味しているらしい。中国人を蒙古人から区別するような正確な記述の欠除は、マルコ・ポーロの紀行と同様にこれら引用書簡の奇妙なものゝ一つである。」（一七八頁）さて Tarse という名前は、アルメニア人の Haithon によるアジアの帝国についての記述のなかに、Yogurs（ウィグル人）の王国であるとはっきり示されている（十四世紀の始めのことである）。モンテ・コルヴィーのジョンが、略同じ時代ごろに北京で書いた書簡のなかに、Tarsic の性格ついて言及して、明らかにウィグル文字だとしている。ユールは（〝東域紀程録〟二〇五で）ウィグル人に対するこの語彙の利用を、ウィグル人の間にいたネストリウス派キリスト教の盛んな流行流布を、示していると考えているようだ。」（二一七頁）としている〕

〔更に郎案：この Tarsā に就いての詳細は、A.C.Moule;Christians in China, before the year 1550, Chapter Ⅷ、蒙古帝国治下の中国におけるキリスト教徒、東方資料に基いての章を引用する。即ち「十三、十四世紀の間の中国及び蒙古帝国にいたキリスト教徒についての記事は、同時代の中国書物や他の文献のなかに見出されるが、私文集や主要な公文書は扱い難い大量な塊りをなしていて、熱狂的な特殊研究家以外興味をもつことは困難な程である。多少の代表的な文章は翻訳せられるだろうし、その記載や事実記事は他の所で注脚として用いられているものの、この章においても、仕方のないことではあるが、完全なものから程遠い有様

である。すくなくても全体像をより容易に理解する希望の元に、その文章の利用は群ごとに集めて、能うる限りの編年順に従って各々の群の資料を並べてみることとした。

二つの語彙、このいずれもが中国語ではないのだが、中国におけるキリスト教徒を記述するため、当時使用されていたわけであるが、このキリスト教徒の大部分が、ネストリウス派の景教徒であり、しかも明らかに大部分の場合生粋の中国人ではなかった。この二つの語彙の一つであるものが新彊に於いて、宗教的な用語というよりは、むしろ国際的用語としてどの様に用いられたか、最近新たに発見せられたZ本で、マルコ・ポーロが、中央アジアと中国とにおいていずれも、さらに亦如何に、キリスト教徒をトルコ人として屢々言及しているかを、上に於てみてきた。その初めの方の言葉は迭屑、すなわち、ペルシア語でいうTarsāで、その意味は〝クェカー教徒〟ないしは〝畏れを知る人たち〟を指し、しかも、（必ずしも軽蔑した意味ではなくて）イスラーム教徒によりキリスト教徒を表わすのに用いられているし、また、キリスト教徒の側から偶像崇拝者に対して用いられている。（注1　Pelliot ペリオはF.W.K.Müller ミュラーに対してUigurica II.pp.76.81,にtrsの語が〝異教徒〟を意味すると述べている。上記論文の7、10、45、178を参照のこと）Tarssiaという言葉が紀元一三七五年に造られたカタラン地図の上に場所・地名として記載され、その地から〝東方の三賢王〟がやってきたといっている。（注2　ユール・コルディエ、東域紀程録、第二冊目巻末地図参照のこと）モンテ・コルヴィノのジョンはlitteris Tursicis（v. ℓ.tarsicis）で非中国人の種族のある者たち、恐らくはウィグル人を指していると思われるのに用いている。〝Naimanの現在の民族は大部分がキリスト教徒（tarsā）、であった〟とする、吾々はJahān kushaiのなかでみることができる。（注3　Ney Elias, E.D.Ross, A History of the Mongols of Central Asia, 1898, p.290）さらに吾々は老道士長春真人の「西遊記」のなかに、この言葉、迭屑に出逢う。即ち「九月の第二日目（一二二一年九月十九日に当

る）彼ら、長春一行は西に向って旅した。四日目に輪台の東に宿泊した。迭屑の首長が彼らを迎えるためにやって来た。」と。（注4　長春真人西遊記（流布版）また Palladius; Chinese Recorder, 1875, p.106; Chavannes T'oung-pao.1904, p.382、といったもの参照。輪臺は鼈思馬大城（Bishbaliq, Urumtsi, or Ti-hua）さらに、常巴拉（Jambaliq）というウィグル人の都市の東方に位置すると記載されている。）…中略…Tarsā という言葉は実際のところ、中国本土でこの元時代に普通に用いられる言葉ではないし、またイスラーム教徒によってずっと用い続けられてきたという証拠は、はるか後の時代に属することである。十七世紀の初めにマテオ・リッチは次のように記している。即ち「マホメット教徒たちは、イエスの後継者たちを意味するIsaiの名前とともに、これらキリスト教徒たちを Terzai と呼んでいる。しかも、わたくし（マテオ）は一アルメニア人がペルシアにおいて、彼らキリスト教徒らがアルメニア人を同じく呼んでいる、と云っているのを聞いたことがある」と。（注6　Opere Stor:I.p.88、また上記七頁を参照のこと。そこでリッチは Terza に就いては一地方の国名であると言っている。迭屑という言葉はわたくしが述べたように元腆章のなかと元朝秘史のなかにみえている。併し、わたくしはその正確な関联をみていないのである。さらにペリオが、タルサーとウィグルが殆んど同義語になっていることを指摘している。すなわちペルシアの歴史家たちはその地の住民を唯単にウィグル人と呼び倣しているが、彼らがキリスト教徒であったが故である。そして Hayton はウィグル人の故地を〝Tarse タルセの王国〟とも呼んでいた。cf.T'oung-pao, 1914.p.636 を参照。）そして吾々はイスラーム文献のなかで読みとれるのだが、両つの家族は Chu-hu-tê（ユダヤ人）と、特邇薩（Tarsâ）からなっているという。しかもこの特邇薩はイエス・キリストの弟子であるといっている。」（前掲書二一六〜二一八頁）と。このタルサーのことについて、J・スチュアート著、熱田俊貞、賀川豊彦訳、『東洋の基督教、景教東漸史（昭和十五年四月、豊文書院刊）』中に、〝ルーブルックは畏兀児族をばネストリ

ウス派の基督教徒としてゐる。ミンガナ博士は「畏兀児族の大多数及びケライト族もまた基督教徒であった」と見てゐる（Mingana Bulletin of the John Rylands Library, 第九巻、三一六頁）。乃満族に就いても同様のことが言へる。乃満といふのは、イルチシ河（Irtish）の上流に臨むタルバガタイ山地（Tarbagatai）に住む土耳古韃靼の九部族の強大な同盟に与へられた名であった。（Rockhill; Rubruck's Journey to Tartary, p.110.116）ルーブルックは、彼らは「乃満族と呼ばれ、ネストリアン基督教徒であり基督教を奉ぜる国王を戴いて居た」と述べてゐる。ペルシアの学者たちは、彼等をば、「タルサ」（Tarsa）と呼んでゐる。この「タルサ」といふのは、「達娑―迭屑」のことで、支那でも、これを基督教徒の呼称として居る。」（一八五～一八六頁）と。〕

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕南の方に陰山山脈が連なり、吾々は天を支えているかと許り、天に聳えている三つの峰を見たのだった。この機縁で長春師は長詩を寄せたのだった。（注161、わたくしブレットシュナイダーが多少疑問に思うのだが、此処で長春眞人が見た山はBogdo olaで、すなわちウルムチ、トルファン、庫車の間に位置して孤峰として聳えた山に結び付いていた。併しながら天山山脈の連山と関联していた。その山は略一万四千呎程の高さで三方にも雪で覆われた頂上をもち、天空に向って聳え立っている。そして沙漠からその山を眺めに近代の旅行家たち全てに途方もない印象を与えた。ブルゼワルスキーによると、その山は二五〇ヴァスト（約二六七km）の距った地点からも望まれた由である。A・レーゲル博士はこの地域の地図のなかに（注153を参照）ボグド・オラ（Bogdo ola）の片影を表示している。ペヴツオフPevtsoffは一八七六年にこの山を訪れていた。）〔郎案：例によってブレッドシュナイダー氏はこれらの詩文の引用を省略している。〕

〔本文〕南望陰山、山峯突兀倚天、因述詩贈書生李伯祥、生相人詩云、三峰並起挿雲寒、四壁横凍繞澗盤、雪嶺

届天人不到、氷池耀日俗難観、人云向此冰池之間観者則神識皆昧巖深可避刀兵害、其巖堅固逢亂世堅守則得免其難水衆能滋稼穡乾、下有泉源可以灌漑田禾毎歳秋成名鎮北方為第一、無人寫向畫圖看。

〔口訳〕南の方に陰山山脈を望むと、三つの峰が突兀として聳えて天を支えているように見える。そこで詩を述べて、書生李伯祥に贈る人相を看る易者の詩韻に次のように云う。即ち、

三峰道起挿雲寒　三つの連峰が並んで起伏し、雲を挿挟んだように寒くみえ、

四壁横陳繞澗盤　これらの山の四周の壁が横にひろがって谷間を廻っている

雪嶺届天人不到　雪をいただいた嶺が天迄達して人間が到達できないでいる

氷池燿日俗難觀　氷った池が陽光に輝いて俗眼では見分け難い

〔注記に云う〕人の云うには此の氷った池に向って見ていると、見ることのできるのは神経の仕わざで、全部が昏く味蒙になっているのが普通である〕

巖深可避刀兵害　その山の巖石は深く谷を造り兵力の害を避けることができる

〔注記〕その岩石の険固なことは乱世に逢っても堅固に守れるので、そこで兵乱を免れることが出来る

水衆能滋稼穡乾　谷や池の水が多く稼穡の乾燥を防いで潤している

〔注記〕谷下に泉源があって、灌漑することが出来、田の稲は秋になると常に実のる

名鎮北方爲第一　こうした名高い地の利を得た要塞は北方第一であって、

無人寫向画図看　誰れもこの実景を写し絵画に於て看れない程のもの

〔王観堂先生の注記に曰く〕湛然居士文集の巻一のなかに次のような詩がある。すなわち、金山を経過するのに当って人が造った詩韻を一律用いた、とあるこの詩韻を長春師が用いたのだろう。

〔郎案「湛然居士文集」巻一、五紙表と裏

雪壓山峰八月寒。　降り積った雪の峯は八月でも寒そう
羊腸樵路曲盤盤。　曲りくねった樵人（そまびと）の山路は錯綜して
千巖競秀清人思　多くの絶崖が競って立ち清々しい思い
萬壑爭流壯我觀。　あまたの瀧が流れ落ち見るからに壯絶
山腹雲開嵐色潤　山腹の雲が切れ渡り嵐色が潤（うる）む
松巔風起雨聲乾。　松のある頃に風が吹き起って雨音が止む
光風滿眥詩囊去　景色の美が満ち溢れ、詩の思ひが消えそうな程
一度思山一度看。　一度思案してから山をもう一度看ようぞ

と次韶しているのが判る。〕

〔本文〕又歴二城、重九日、至回紇昌八剌城

〔口訳〕また二つの都城を過ぎて、九月九日、重陽の節句の日にウイグル人の住む昌八剌という都城に到著した。

〔王観堂先生の注記に曰く〕「元史」の西北地付録に、彰八里に作っている地名がある。この八里という表現は城郭・堡壘のことである。また「唐書」地理志によると、輪臺県の西方百五十里の所に、張堡城という堡壘があって、守捉している由が記されているが、恐らくは此の張堡城がそれに当るのであろうか。

〔郎案：馮承鈞原著、陸峻嶺増訂「西域地名」増訂本訂によるに、Janbaligh〝新唐書、地理志〟巻四十、北庭大都護府之条「張堡城守捉」、長春〝西遊記〟之「昌八利里」〝元史、西北地付録〟之「彰八里」〝耶律希亮伝〟之「昌八里」〝李進伝〟之「摻八里」皆一地之異称。此城石別失八里之西、天山北麓、往伊犂之大道間、海屯。〝行記〟亦載有此地名、位於今呼圖壁之東、故當為今新彊之昌吉、或其付近。

元史巻六十三、地理志、西北地付録に「展斡爾、原作彰八里、至元十五年授多爾濟金符、掌展斡爾軍站事」

とあり」

〔本文〕其王畏午児与鎮海有舊、率衆部族及回紇僧、皆遠迎既入斎於臺上泊、其夫人勧蒲萄酒、且献西瓜、其重及秤、甘瓜如枕許、其香味蓋中国未有也。園蔬同中區、有僧来侍座、使訳者問、看何経典、僧云剃度受戒禮佛為師。蓋此以東昔屬唐、故西去無僧監本僧下有道字回紇但禮西方耳。翌日傍陰山而西約十程、又度沙塲、其沙細遇風則流状如驚濤、乍聚乍散、寸草不萌、車陷馬滞一昼夜、方出蓋白骨甸大沙分流也。南際陰山之麓、踰沙又五日、宿陰山北詰、朝南行長坂七八十里、抵暮又乃宿、天甚寒又無水、晨起西南行約二十里、忽有大池、方圓幾二百里、雪峰環之倒影池中、師名之曰天池。

〔口訳〕このウィグルの昌八剌城の王の名は畏午児といって、鎮海と共に元来旧知で多くの部族とウィグル人を率いて勢力があった。僧たちが皆遠くから歓迎にやって来ていたが、既に潔斎の行に入っていて、その齋場台に泊っていたのだった。その王妃の夫人は蒲萄酒を勧めてくれ、また西瓜を献上してくれた。その西瓜の重量は秤にかけてみると甘瓜の重さ程に及び、大きさも枕の大きさ程あった。その香といい味といい中国内地では未だ味えなかったものであった。庭園や蔬菜畑の様子は中国と同じである。僧たちがやって来て、わたくしたちに侍座し仕えてくれた。訳者を通じて「貴方がた僧侶はどの様な経典を翻読しているのですか」と問うてみた。すると僧の答えて云ふのには「剃髪・得度し、受戒、礼仏の儀礼はすべて師匠の云う通りにしております」とあった。蓋しこうした在り方はこの地から東方域が昔は唐の勢力下にあったためと思われる。だから西方の地域には僧侶がいないのであると。ウィグル人は唯西方に向って礼拝しているに過ぎないと考えられる。さて翌日陰山山脈の傍に沿うて西方に約十里程進むと、又沙漠を渡らなくてはならなくなった。その沙漠の沙粒は細かくて、風の吹くのに遇うとそれが吹き流されて、その状態は丁度狂瀾怒涛をみるようで、或る時には忽ち集まって堆積をなし、時には忽ち散失してしまう。そこではわずか許りの草も萌え出ることなく、そこを通る車は柔らかい流沙に陥没

し、馬は蹄が踏み込んで滞ってしまう程である。この間一昼夜かかって漸く脱出できた程だった。恐らくは白骨甸大流沙砂漠の分流地に当るのだろうと思われる。陰山山脈の南の際の麓を、流沙を踰え渡って行くこと五日、陰山の北詰の処に宿泊した。朝に南に向って進み長坂七・八十里行くと、暮方になったのでそこで宿泊した。天候は甚だ寒冷で又水も無かった。早朝に起きて西南方向に行くこと約二十里、忽然として大きな池が出現した。その池の周囲は二百里に近く、その水面に雪をいたゞいた峰が連なりながら逆に映っている様子は美事であった。長春師は此の池を名づけて天池と云った。

〔王観堂先生の注記に曰く〕今の賽里木泊「西遊録」によるのに、陰山山脈の東西の長さは千里、南北は二百里許り、山頂に池があって、その周囲は七・八十里、その樹木の陰がかげり覆っていて、太陽の光を露ほども見せない程である。

〔本文〕沿池正南下、左右峯巒峭抜、松樺陰森、高踰百尺、自巓及麓、何啻萬株。

〔口訳〕池に沿って真南に下ると、左右に聳える峨々たる峰が高く抜きんでてみえ、松や樺の樹々が欝蒼として森林を形造り、高い所で百尺を踰えている程である。その山頂から麓に及ぶ迄、その樹木は何万株を数えるかわからない程である。

〔王観堂先生の注記に曰く〕今、松樹の頭頂は、金元の頃にはこれを松關と謂っていた。湛然居士集の巻三に、夏国新安県を過ぐという詩に、〔郎案：題詩の下に時丁亥九月望とある。西暦一二二七年に当る〕

昔年今日度松關、昔から今日に到る迄松関を渡っているが（自注に西域の陰山山脈に松関と云う所がある）

車馬崎嶇行路難、こうした松関を行く車馬の行路は凹凸が激しくて進むのが容易でない

瀚海潮噴千浪白　しかも瀚海は荒れて潮流が噴蕩して多くの波頭が白く見える〔自注に「一に千里雪」とする〕

天山風吼万林丹　天山から吹き下す風が吼えているように鳴りすべての林が丹い。〔以下略〕

とあり、同じ光景と賦しているのがわかる。

〔本文〕衆流入峡、奔騰胸涌　曲折彎環可六七（監本七下有十字）里、二太子扈従西征、

〔口訳〕多くの流れが狭い谷に入り込み、走り渦き湧き上ったり、曲りくねって環を描いている様子が六・七里程もあるだろうか、此の路を二人のチャガタイ汗国の太子が、皇帝に付き従って西の方に遠征したという。

〔王観堂先生の注記に曰く〕元史の宗室世系表をみると、太組皇帝の六人の子供に続いて、次に二人のチャガタイ汗国の太子がみえている。

〔郎案：百衲本「元史」巻一百六、表第一の、「太祖皇帝六子、長卓沁（原作木赤）太子、次二察字台（原作察合台）太子」とあり、察字台太子位として

察字台　伊蘇孟克王（原作也速蒙哥）
哈喇實喇大王、阿勒呼木大王、原作合剌旭烈

と見えている。これらの太子を指すならんか。」

〔本文〕始鑿石理道、刊木為四十八橋、橋可並車、薄暮宿峡中、翌日方出入東西大川、水草盈秀、天気似春、稍有桑棗、次及一程、九月二十七日至阿里馬城。

〔口訳〕始め石を鑿開して道を整備し、木を伐りだして四十八もの橋を架けたりした。その橋は車が二輌並んで通れる位の余裕があった。薄暮の頃合いに峡間に宿泊した。翌日は東西方向に流れる、大きな川に至ったが水草がたけ高く生繁っていた。天気は春の陽気に似ていたし、僅かながらではあるが桑や棗の樹もあった。次いで、一旅程を過すと、九月二十七日に阿里馬城に到着したのである。

〔王観堂先生の注記に曰く〕「元史」の地理志の西北地付録の条項に阿力麻里という名の城塞に造っている。「西

游録」によると、陰山山脈を出る阿里馬城があると云っている。西方の胡人たちは林檎を目して阿里馬と呼んでいるのである。付近の区部は全部林檎園であったので、そのために、こうした名前をつけて呼んでいるのだろう。考えてみると、この阿里馬城は伊犁河の東にあって、土地柄を望んでこの河を渡ったこの阿里馬城は唐書の地理志に注記されている弓月城に当たるのだろうと思われる。

〔郎案：百衲本「元史巻六十二、地理志第十四」によると、

西北地付録（中略）

阿里瑪爾、（原作阿力麻里）諸五海都行営于阿里瑪圖等處、蓋其分地也。自上都西北行六千里、至回鶻五城、唐號北庭置都護府、又西北行四・五千里、至阿里瑪圖、至元五年海都叛挙兵南来、世祖逆敗之于北庭。又追至阿里瑪圖、則又遠遁二千餘里、上令勿追、以皇子北平王統諸軍于阿里瑪圖、以鎮之、命丞相安圖往輔之。

とあり。さらに憑承鈞原編、陵峻嶺増訂「西域地名」Almalik の條に

「名は波斯史家の著作にも見えている。〈西遊録〉や〈西遊記〉などには阿里馬とあり、〈西使記〉〈元史〉には阿里麻里とある。だが〈元史〉には亦「阿力麻里」とも作っている。海屯の〈行記〉には Alualigh の地名があるが、考えてみると、此の Alualigh という名前の綴りの中に、u を v にした異なった写本もありこの v は m の転音となっているというので、そこで Almaligh（阿力麻里）としているのである。阿力麻里は一つには城都の名前だとしているが、その遺跡は今の霍城（霍爾果斯）の東十三公里の地点である阿爾泰地方、（これは阿脱諾克、その意味は「金子を出す処」といったものである。もう一つは地名を表わすとする説で、凡を嗒勒奇山、克干山以南の地で、汗騰格里山以北に限られ、今の伊犁地区を包括しているのであり、皆、阿力麻里の範園に属している。元の時代には察合台分地となっていた。」とある〕

〔ブレッドシュナイダー氏の訳注〕

二城を通過した後に、九月九日（実際に西洋の暦では九月二十六日に当る）ウィグル人たちの住む昌八剌城に到達した。（注記162　この昌八剌城という名前は恐らくDjambalikだったと思われる。Balikは城都を意味している。此の昌八剌城は「元史」のなかに繰り返えし記載され言及されている。この城は中国の中世の地図に、Bie-shi-ba-laの西に図示されている。小アルメニア王国の王Haitonは蒙古からの帰路に、Bishbalikの西にあるDjambalikhについて言及している。このDjambalikは明らかに天山山脈の北麓に沿うて走っている大幹線道路上に位置しているのである。そのため、現今みるようにSairam湖に達している道筋でさらにイリ河渓谷に迄及ぶのである。A・レーゲル博士はウルムチからKuldjaの道を辿った揚句に、彼の地図に多くの廃虚となった都市を記載している。）その地の王（支配者、太守）は畏午児であった。（注記163　「元史」のなかで、この畏午児の名前はウィグル人に当てられている。このウィグル国については、さらに特別に言及するにおいては読者子に第二部での関朕の記事をみていたゞきたい。）この王は瀚海の古い友人であり、そこで彼の親類縁者と一緒にウィグル人の僧侶を伴い遥か城外迄、吾々に逢うために出掛けてきたのだった。吾々がそこに到著した後に、王は宮殿のテラスで宴席を設けてくれたが、王妃自ら吾々に葡萄酒を周旋してくれた。彼らは亦非常に重量のある西瓜や甘いメロンをもって来てくれた。〔郎案：この条りをブレッドシュナイダー氏の訳文と本文とを参照するのに「西瓜（メロン）は大きいが枕程もあって、その香りと云い味と云い、また中国で味わったことのない程美味美香であった。これらの果樹園や畑は中国と同様であった」と云う所を省略している。〕

長春師は仏教徒の訪問を嘉納して、通訳の助けをかりてこの僧と語り合った。此の国は、この地から東方域にかけて、唐代に中国に属していたことを観察したに違いないと思われる。この地の西方にかけての地には

仏教徒も道教徒もいない。このウィグル人の国は西方の儀礼・宗教を信仰していたのである。（注164　この回紇の文字でマホメット教徒であることが理解される筈である（注49を参照）と云うのは、礼拝している時に彼らは常にメッカの方に向っているのであるからだ。）

翌日、吾々は更に西に向って旅を続けた。そして略十の駅遞を経過する程遠く陰山山脈の（北側の傾斜）に沿って進んだのだった。此処で吾々は亦砂漠帯を越えたのだったが、この地域で流沙が風に吹かれて岩肌に堆積してあたかも海の波涛のような姿を呈していた。（注165　これらの沙漠帯は恐らくCyollos kagonすなわち〝風砂丘〟であるらしい。一四世紀のマリグノリMarignolliによってアルマレックArmalecから北京（カンバリク）迄の途上で目に着いたものである。ユール氏著「カタイへの道」三三九頁を参照亦Arab Shali巻一、第四十五章：「蒙古地帯で丘のように堆積した場所」とある。）〔郎案：H.Yule;Cathay and the way thither, vol, Ⅲ.p.213の部分を抄訳する。即ち、「併しながらタルタル人は、神の許しによって、しかも驚くべき熟達により、この沙漠を越え、智者たちが死の越ゆべからざる地帯と呼んでいる所を、彼ら自らが親しく覩たのだった。（注1　彼、即ちJohn de MalignolliがCyollos Kagon〔or Kagan in Ven.Ms.,〕が砂丘を指して云っているのかどうか全く明らかではないのである。その位置はゴビ沙漠の北方縁辺に明らかに見出すことができる。この地こそマリグノリが云う乾き切った灼熱の地であり、また恐らくはカミルの北東方にあると思われる。実際のところ付近は、トルキスタンに於ける中国人の著作のなかで、吾々は屢々、沙山、すなわち砂の山についての記述を見出すのだが。そこから、カミルの北のBarkul Nurの水源から水が流れ出している〔それについてはJulien in N.Ann, des Voyages, 1846, iii, 37〜44〕。この報告の一つに、〝中央アジアのロシア人たち〟〔The Russians in Central Asia, London, 1865, p.111〕に訳されて、この沙漠について次のように云っている。即ち、「この地域（ヤルカンド近く）からこの広がりは、東方に行

くに従ってだんだんと広くなるが、此処で巨大なゴビ沙漠となる。全ての生き物を拒否していて、此の地の住民たちがgag（山）といった名前を与えているほど、峨々たる山辺を思わす程に砂が堆積している処である。と云っている。若しもこうした記述が誤りでないならば、吾々は此処でマルグノリによって用いられた名前の一要素を此処に見るのであって、トルコ語やペルシア語のChül沙漠を表わす言葉だが、ヴァムベリィー氏によってTchölと書かれているものに相当するが、このTchölは吾々が他の処で知っている言葉である。）併し乍ら、タルタル人たちはそこを越えたのだったし、またわたくしもやってのけたのだった。しかも二回もである。DavidがPsalmsのなかで〝Posuit desertum〟（砂漠なるもの）といっているのが正にこれである。（注2　Posuit Desertum in stagna〔Ps.cvi, our cvii, 35〕恐らくこの乾き切った灼熱の地を二度渡過したことが、恐らくMeinertの示唆によって正しく説明されていて、マリグノリがシリア沙漠に関聯していた記述もそこであって、シリア沙漠をヨーロッパへの帰途に横断したのだった。全く同じような荒蕪地の帯状地域で唯一の他の場所でもある所なのだ。この乾燥し切った灼熱の地帯には生物が棲んでいなかった由が主張され、よく知られていることであり、アルストテレスや他の多くの哲学者の主張する所でもあった。）此の地域を越えた後に、吾々は東方帝国の首都Cambelecにやって来た。」（ユール氏、前掲書、二一三頁）（ブレッドシュナイダー氏の前掲文注記165の続き、亦、〝Arab shah〟（chap 45）の記述と比較参照のこと。）そこには一木一草も見当らない、それで車輌は砂のなかに深くはまり込んで、また馬も砂のなかに沈んでしまう程であった。この砂漠帯を越えるのに丸一日かかってしまう旅程であった。この地域は大沙漠、すなわち瀚海の一部であるらしい。白骨甸とも呼ばれている所の一部分である。蔭山山脈によって南を区別されている地域に当る。（注166　この長春師による蔭山山脈の北斜面に沿ってSairamサイラム湖まで辿った旅程は、依然として大道であり、そこにはウルムチまでの商業貿易の隊商がクチャを通って行く道

でもあった。レーゲル博士はトルファンまでの調査探検からウルムチへの帰途に、この大道を利用したのだった。長春師が渡渉せねばならなかったこの沙漠は最近の地図によるとEbinorエビノール湖の南と南東に渉って記されてある。古代の蒙古人の辿った道はサイラム湖に到達する前にBorotalaボロタラ渓谷によって通じていたと思われる。）

この大砂漠を離れた後、吾々は五日間旅をして、陰山山脈の北側に宿営した。翌日の早朝に、長い傾斜地に沿うて七、八十里許り進んだ。そしてその夕方に憩うために留まった。空気は冷えていて、吾々は飲み水が見つからなかった。翌日、再び出発し、南西方向に旅したのだった。そして二十里程はなれた所で、突然周囲約二百里程の湖沼の素晴らしい眺をほしいままにしたのである。この湖は四周ぐるり雪をいただいた峰々に取り囲まれ、それが湖面に映し出されていた。そこで長春師はその名前を天池と名付けた。（注記167、この全く同一の湖は、耶律楚材の記述のなかに物語られている。〔郎案：「西遊記」に、「陰山東西千里、南北二百里其山之頂有圓地、周圓七・八十里許」〕ブレットシュナイダー氏はこれに注記して「此処で著者は陰山をもってボロクホロ、すなわちタルキ山脈を指しているらしい。天山山脈の一支脈で、クルジャの北で北西方向に伸びている。この山の上にある湖は明らかにサイラム湖である。プルゼワルスキー氏はこの天山山脈のなかで、野生の状態で非常に豊富な林檎の樹や棗の繁茂してるのに注目してる。）

この湖こそKuldjaの北に連なる山中にあるSairamサイラム湖であることは殆んど疑いない様である。この湖は亦キルギス名でも姿を見せ、アルメニア人のハイトン王の物語りのなかにSutkulとして見えている。（注476を参照のこと）— Sutkulの名前と〝乳の海〟といった意味はクラプロート氏によって遺憾なく説明されている。このキルギス語でのsutkulは今でも尚〝乳湖〟を意味していて、しかもこの名前はキルギス人たちによって吾々の地図上に見えているSairam湖に比定している。この湖はKuldjaの北方の山中に位

置している。Suiram ないし、クラプロートが書いているようにSairim 即ちChagan Sairim nor（透徹した白い湖の意）はその蒙古名である。（注167を参照のこと）―ロシア人旅行家であるPutimtsoff プティムツォフは、一八一一年の砌この湖を訪れた最初のヨーロッパ人であったが、彼はこの湖について正確な記述を与えている。クラプロート氏 Klaproth; Magasin Asiatique 第一巻を参照のこと。併しながら、このSairam サイラム湖とその周辺の地方が、ロシアの風土学者たちによって研究調査されるようになったのは、実に一八七一年のKuldja 地方をロシアが占有して以後においてのみであった。一八七三年の秋に、Schuyler スキュイラー氏がこの興味深い山中の湖に訪問の機を得たのだった。そこで彼は長春師がこの湖についてのすばらしい記述を与えているのを知ったのである。（Schuyler's “Turkistan” ii.p.188）またA.Regel レーゲル博士は一八七七年の七月に、この地方の植物を研究した最初の自然博物学者でもあった。）この湖岸に沿って南の方向に降りて行くと、その両側に切り立った垂直の摩崖とぎざぎざになった頂き以外何も見えない。これらの山脈の山々は濃密な森林で山頂まで覆われていて、百フィート以上の高さに松や樺の樹々が繁茂している。川の流れが略六・七十里に渉り渓谷の中を走り、激しく奮騰し、時に急激に渦巻き洶涌する。その当時、皇帝と供に西方に遠征していた第二王子（注記168、成吉思汗の第二王子チャガタイChagatai を指す）これらの山脈を横断して行進していたが、岩を切り開いて道を造り、山から伐り出した材木で四十八の橋を架設したのだった。この橋梁は巾が広くて二車輛が往き来できる程であった（注記169、パラディウスは耶律楚材がそれについて優れた詩を造り、これらの橋に言及した上、さたに亦素晴しい眺めをもつ山中の湖について記述しているのに注目している。）〔郎案：パラディウスの指摘した耶律楚材の詩文は、「湛然居士集」巻二に所収する「過陰山和人韻」を指している。今その全文を掲げる。〔案ずるに陰山は即ち西金山で、此処を過ぎると斜米思干域に到る。應に文正公作る所の「西遊録」に詳しい〕

陰山千里横東西　陰山は千里にも東西に渉って横臥り
秋聲浩浩明秋溪　秋風が浩々として吹き渡り渓の秋景も明らか
猿猱鴻鵠不能過　猿や獣、大鳥も小鳥も渡ることが出来ぬ
天兵百萬馳霜號　皇帝の兵百萬の駿馬が馳せたところ〔案ずるに太祖の成吉思汗が此処で兵を用いてイスラーム圏とインドに到った〕

萬頃松風落松子　松を渡る風が度々吹き、松毬子（まつぼっくり）を落す
鬱鬱蒼蒼映流水　鬱蒼とした松が流水に映え渡り
六丁何事誇神威　道教の神でもどうして神威を誇れようか
天台羅浮移到此　天台山と云い羅浮山と云い此処に移してみれば
雲霞掩翳山重重　雲か霞か山陰を重々しく掩って
峯巒突兀何雄雄　峯々の突兀として聳える様は何と雄大か
古来天險阻西城　昔からこの陰山の天険は西域を隔て
人煙不中原通細　人の生活はままならず中原と僅かしか通せずに
路縈紆斜復直山　山道はうねり傾き、すぐに山に逢う程
山角摩天不盈尺　山の岩角は天を摩する様にぎっちり聳え
溪風蕭蕭溪水寒　谷を渡る風は蕭然として谷の水も寒そう
花落空山人影寂　花が散り空ろな山に人影なく寂しい
四十八橋横雁行　かの四十八橋梁が雁行するように横臥り
勝遊奇觀眞非常　この天下の奇観を賞で遊べば全く別天地

臨高俯視千萬仞　上を望んでも俯観しても千万の壁
令人凛凛生恐惶　見る人は襟元が寒くなり恐怖心を起す
百里鏡湖山頂上　百里にも及ぶ鏡のような湖は山頂にあり
旦暮雲煙浮氣象　朝な夕な立ちこめる雲煙は蜃気楼のよう
山南山北多幽絶　南を向いても北を向いても幽邃の極み
幾派飛泉練千丈　いくつもの瀧の流れは千丈の練絹のよう
大河西注渡無窮　大河となって西に流れると波涛きわきりなく
千溪萬壑皆會同　千の谷も万の岩壁も一同に会したよう
君成綺語壯奇誕　若し詩文を造ろうとすれば荘絶奇景が生れよう
造物縮手神無功　造物主も手が畏縮して神々しさを失おう
山高四更纔吐月　山が高く丑（うし）の刻（午前二～三時）になって僅か月が見え
八月山峯半埋雪　八月になっても山の峯は半ば雪に埋れ
遙思山外屯邊兵　遙かに陰山の外で辺彊を守る兵士を思うのみ
西衣冷徹征衣鐵　西域での衣服も冷たかろうし、戎衣も鉄のように冷たいかろう

吾々は一夜を渓谷中に過した。（注記170、長春師がサイラム湖の周辺の山からイリ河の沃野まで降って行ったその渓谷は、今日、タルキ峠の名前で知られていて、云ってみるとボロクホロ山系を越えて行く峠なのである。スクュイラー氏の前掲巻二の一八八頁によると、〝小さな川タルキ（全く同じ名前の峡谷の中にある）は小さな渦巻きを連らねて岩の上を転々洶々しながら流れて来ている。岩の高い屏風状に切り立った所には、華麗な花草が望見される。それは野生の林檎、野生の棗・楡・ポプラなどの樹々からなる〟と。北京からク

ルジャまでの中国の駅遞路はこのサイラム湖の畔りを通り、タルキ峡谷、クルジャの北西に位置するスイダムを経過するのである。しかも翌朝そこを出発して、東から西へ延びた水流の豊富な、草の肥大に繁茂した広濶な谷間に入った。さらにあちらこちらに桑科の樹々、棗の樹々が茂っている。（注記171、イリ河の渓谷がそれに当る）此の地から次の駅遞は阿里馬城であった。（注記172、ペルンア人の中世の旅行家たちの云う、アルマリクに当る。尚注記19と比較参照せよ。或る種のオリエント研究者たちは、近代の中国地図に出ている阿里馬城と古代のアリマリクと同一と見做しているが、イッシクル湖の北、今日云う所のヴェルニに当てている。併し、古代のアリマリクはイリ河の渓谷の中に位置していて、現在のクルジャからそれ程遠くない所にあることは疑いない筈である。セメノフ氏はリッター氏の〝アジア記〟第二巻九十六頁のロシア語訳のなかで、このアルマリクがイリ河の渓谷中に存在していて、クルジャの町から北西約四〇ヴァースト（約四二〇㎞）の所だとする記事を引用する。故ザクハロフ教授（彼は昨年没したが）はセメノフ氏が此の地を訪問した折に、グルジアでロシア人の相談役を務めていた由で、彼はわたくしに上記のような推論をセメノフ氏に伝えたことがあると話してくれた。と云うのも、スイドゥンからセヴァーストの距離に古代都市遺跡があった由の風説伝聞から知っていたのである。

〔本文〕舗速満国王

〔口訳〕舗速満国王、ムスルマン国王、〔郎案：岩村忍訳注、「長春真人、西遊記」李志常（昭和三十六年八月、筑摩書房刊、〝世界ノンフィクション全集〟19の注に「原文〝舗速満〟Musslman、元史には木速蛮、耶律楚材の西遊録は謀速魯蛮、劉郁の西使記には没速魯蛮に作る。ここにいうイスラム教徒の王はスグナーク・テギンである。（ドーソン「蒙古史」）」とある。〔郎案：このドーソン「蒙古史」は佐口透氏によって訳注が施こされて、「モンゴル帝国史」六冊平凡社刊、東洋文庫に収められている。その第一冊、第一篇、第三章ウイグル族とその

臣従の項に「チンギスカンはこれと同時に、カラ・キタイのグル・カンの別の万国であったトルコ・カルルク族の首長で、カヤリクの王アルスラーン・カンとアルマリクの王、オザル〔注5、またはブザル〕両者の朝貢を受けた。オザルは、まもなく狩猟に出ているときに捕えられ、グチュルクの命令で殺されたので、その子のスクナーク・テギン Siknak Tékinはチンギス・カンの命令に従って王位を継承し、またその長子ジュウチ Djoutchiの娘と結婚した。」（前掲書、九七頁、原文は第一巻一一一頁）尚同書第六章、チンギス・カンホラズム帝国への進撃の頃に、「チンギス・カンはモンゴリア（本土）の管理を弟のオトチギンに委ねたのち、同年（一二一八年）の末ころ進軍を開始した。チンギス・カンは翌年（一二一九年）の夏の間は、イルティシュ河畔に駐営して馬を休養させ、秋になって進軍を続けたが、そこへウィグル王、アルマリク王のクスナーク・テギン Siknak-Tékin、カルルク族のアルスラーン・カンが来り会した」（前掲書、一八四頁、原文二一二頁）にあたり、このことは次の王観堂先生の注記に詳細に触れられている〕

〔王観堂先生の注記に曰く〕洪侍郎鈞（馮承鈞）が多桑ドーソンの蒙古史の書を引いて、阿力麻里王を雪格那克的斤とあるのが、即ち此の舗速満国王であろうとした。この舗速満は「元史」で木速児蠻に作っており、「西遊録」には謀速魯蠻に作っている。また「西使記」には没速魯蠻に作ってもいる。その意義はいずれも回教徒を指しているとする。此れは舗速満国王が蓋し、阿里馬城以西の諸国がいずれも一様に回教を信仰していることにも関朕している。上記に云った西方に行くに従って僧侶は居なくなるというのも此れによっているのである。

〔本文〕暨蒙古塔剌忽只

〔口訳〕及び蒙古人の塔剌忽只（タルガチ）〔郎案：岩村忍氏訳注（前掲）に「元史には達魯花赤に作る。蒙古語の darughachi 総督のごときものであった。」とある。陸軍省編纂「蒙古語大辞典、上巻、蒙和之部（昭和四十六年十一月、国書刊行会、再刊本）に（蒙古字略）daroga 頭目、首領、長官とある。」〕

〔王観堂先生の注記に曰く〕達魯花赤の異った訳語であろう。

〔本文〕領諸部人来迎、宿於西果園、土人呼果、為阿里馬、蓋多果實以是名其城、其地出帛目、曰禿鹿麻

〔口訳〕諸部の人たちが迎えにやってきて、わたくしたちは西果園に宿営した。この土地の住民たちは果実を指して阿里馬と呼んでいるのだが、この阿里馬城も果実が多いところからその名をとったのであろう。またこの地は帛目を産出するのであるが、それを禿鹿麻と呼んでいる。

〔王観堂先生の注記に曰く〕翻訳名義集の巻七のなかに兜羅緜という言葉があって、或る場合に妬羅緜という樹の名に由来すると云っている。元来緜は樹から生ずるものであるので、そこで妬羅緜がよって称号されているのであり、その樹は柳絮のような姿をしているものである。亦一方では翻楊華という種類の樹があって、それを或いは兜羅毦と称しているが、それは毛毳、毛が房々しているのによっている。「諸蕃志」の巻上をみると、南毗国は諸々の彩色の番布、兜羅緜を産出するといっている。

〔郎案：「諸蕃志」の南毗国の条を F.Hirth & W.Rockhill; Chau-ju-Kua;His work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-Fan-chi, の16 Malabar 南毗国の条を抄訳すべし。「南毗国は南西の極に存在する。（注1　乃至更に正しくは南毗国すなわち Malabor マラバール半島の爪の部分にあたる所にある。元来南毗の名は正確ではなくて、信じられる限りで、趙如适の時代を遡る。この南毗国の條に付属する文章のなかで趙如适によって加えられた南毗国の依存隷属関係を扱った表示を基にマラバール人の主権がネッローレからウカムベイまでに及んでいたことが知られる。そして吾々が前章から知り得たようにセイロン島まで包括されていたようである。「西洋朝貢典録〔郎案：諸橋漢和に曰く、『「書名三巻明黄雀曽撰・明に朝貢した占城（チャムパ）・真臘・瓜哇（ジャク）、三佛斎国、満剌加、浮沢、蘇禄、彭亨、琉球暹羅、阿魯蘇門劉利、南浮里溜山、錫蘭山、楴葛剌、小葛蘭河枝、古里祖法児、忽魯謨斯、阿丹天方』の二十三国

の記事からなり、一国毎に論があり、凡を道里の遠近、風俗の美悪、物産、器用、言語、衣服の異に至るまで詳さに記してある〔澤古齋重鈔七集、借月山房彙鈔三十九〕この「西洋朝貢典録」はA.D.一四三〇〔明、宣宗、宣徳五年〕ごろ、宦官の鄭和による有名な遠征記録でもあるのだが、そのなかで、次のように云っている。即ち、五種の姓氏があり、南毗回回（イスラーム教徒）、哲地（Chittis）、革令（Klings）、木瓜（Mukuva）、がそれで、コモリン岬の近くの半島の西海岸の漁民に当てられた名前である。フィリップス氏の「王立アジア協会雑誌」一八九六年刊、三四二頁に南毗として最初の名前が見られるが、それは亦Naviという名を訛訳したものとする意見がある。この昆と毗と云う文字は非常によく似ているので、筆写人が容易に混同したものと思われる。此の当時の三佛齊九國から南毗まで航海をする必要性は、丁度前記の港からクイランまで航海するのに普通与えられたのと全く同じものである。補遺の章で趙如适は季節風を利用して、南毗からセィロンに到達するまでに五日間航行した船を用いたと云っている。そのために、南毗ないし南毗國の主要な港は実際のところ趙如适の云うように、半島の南西極端部にあることを示しているとみてよい。）三佛斎国から、一ヶ月余かかって便風モンスーンを利用して到達できるだろう。この南毗王国の首都は蔑阿抹と号している、中国語で表現すると禮司と全く同じ意味がある。（注2　蔑阿抹、広東方言ではMit-a-matと発音し、南毗に隷属関係にある趙如适の示した表のなかの麻哩抹と全く同じである。この麻哩抹地区は他の章の所で、Wu-li-pa（広東語でMa-li-pat）と呼び、そのいずれも恐らくはマラバールの名前を訛ったものと思われる。この禮司は犠牲の祭りを司る、祭官、神官に当るものを意味するが、何の説明を要しない。）この国の支配者たちは衣をまとい、裸足で出歩いている。またターバンを巻き付け、白の綿布とともに麻布をも着ている。時として、王様は細いひだのある白綿の袴をはき、外出するに際しては、象に騎り、真株や宝石を散り嵌めた黄金製の帽をかぶる。彼の腕には金糸が飾られて、両脚の周りに黄金の鎖を巻きつ

けている。

王家の紋章のなかには真紅色の生地に孔雀の羽根を縫取りした紋盾があり、二十人を越す人びとによりぐるり護衛されている。王様は亦、選ばれた美貌の略五百人からなる番婦たちにより守護されている。これらの番婦は先頭に立って舞踊しながら道を先導する。しかも彼女たちは着飾り、裸足で木綿の衣服をまとっている。また扈従者は裸馬に騎乗してもいる。彼らは褌袴をつけ、髪型は結い上げ、真珠の頸飾りや黄金の釧をつけて、身体には香乳や麝香、他の香料で化粧し、孔雀の羽根からなる傘蓋で太陽から身を守る。（注3　エドリシ Edrisi:I.177 Jaubert's transl. このマールヴァ・バルハラの王様について言及し、〝王は歩兵軍団と象軍を保有し…頭に黄金製の王冠をかぶる。…彼は多くの場合馬に跨り特に一週間に一度は唯婦人たちのみを同伴する。その婦人の数は百人にも及ぶ。彼からは豪奢に着飾り、肢や腰に黄金や銀の環を著けている。髪は編んで結っている。彼女たちは競技に興じ勝負を競うが、王は彼女らの前を先行する。…王は多くの場合象を所有して、この象軍こそ彼の主要戦力となっている〟と。）

この舞踊する女性たちの前には王の輿を担ぐ人びとがいて、王は白番緜の布団に座しているので、それが布袋轎と呼ばれているし、その轎輿は金と銀とで造られた支柱で飾られている。（注4　布袋轎―〝木緜の袋で座を造った椅子〟の意味。インドの南西海岸では、これが一人乗りで四〜六人で担ぐ轎となり mariyil と呼ばれている。これは亦ハンモック式の轎でもある。Yule & Burnell:Glossory 456.sub voce Muncheel〔郎案：Hobson-Jobson;Muncheel, Manjeel:の項を抄訳すべし。「この言葉はインドの南西海岸に固有のものである Malayal, で manjil, mañchal〟これはサンスクリット語の mañcha から由来している。それは一種のハンモック式の轎の名で、この地方で四人〜六人で担ぐ一人乗りの轎、インド式の轎として用いられた。それは亦本質的にはヒマーラヤの dandy と全く同じものである。が併しさらに豪奢な造りのものである。

Correaは記述しているが名指していない。一五六一年の例―彼は工房に人びとの肩に担がれた轎でやって来た。この轎は厚い藤の籐を用い、それを上方に曲げてカーヴを造り、そしてそこから広さ半ファトムの布製を垂らす、その長さは、一・五ファトムある。支柱から垂れ下った裂れを支えるように出来るだけ大きな木片を用いる。そしてこの布裂の上に全く裂れの大きさと同じ座蒲団をひく…このようにして全体を非常に飾り立て、貴人に適わしい裕福さをみせて…できる限りの贅を尽すのである…Correa, three Voyages, &c. c.p.199.）Ralph Fitchが一五八三年から一五九一年にかけてビルマのペグーにいて、Delingegesに旅行した折、藤の籐で編んだ上等な布で造られた轎の一種があるのを見聞し、三～四人で担いでいた由である。Hakluyt.Princ. Vavigations, V, 486（Mac, Lehosis edit.）この南毗王国に於ては沙土が多いために、王様が外出遊行するのに先立って、先ず係官を派遣して百人の兵士を伴い沙塵が巻上げて埃だらけにならないように、地面に潅水するために先導させる。住民たちは彼らの食事に非常に気をつかっている。というのも食事の料理法が何百種とある位であるし、また毎日献立が変化している程である。

その地には翰林と呼ばれる官史が居り、王様の前で食物と飲物をならべ、どの位多く王様が食事を摂るかを検分し、王の食事の量を一定に保って普通量を越えないようにしている。万一、王様が食事量を越えて病気にでもなろうものなら、その時はこの翰林は王の排摂物、糞を検味しなくてはならないし、その糞の甘苦に従って処方するのである。

この国の住民たちは暗褐色の皮膚をして、彼らの両耳の輪は肩まで垂れ下っている。彼らは弓射に熟達し、剣・槍にも器用な術を示す。彼らは戦闘を好み象に騎り、戦場に出る。その折彼らは彩色の美しいターバンを巻く。彼らは特に仏教に深く帰依している。（注5　此処では、インドの胡茶辣国guzeratや他の様々の国について言及するように、趙如适は神像を目して仏（陀）の言葉を用いているが、それは文字通りの意味

ではない。太秦（Bagdad）について言及する際に趙は貴人たちは仏陀を信仰していると云い、仏陀の尊崇に従っているとしている。他の個所では、彼はマホメットを仏陀と呼んだりしている。他の処では婆羅門仏とも云う。また麻逸国（フィリピン群島）の第四十章の処で、石造神像を〝仏陀〟と呼んでいる。趙のヒンドゥー教と仏教との信仰を混同しているのは止むを得まいし、それを再三、犯しているのである。十五世紀の馬歓も全く同じ誤りを犯しているのであり、〔郎案、馬歓著「瀛涯勝覧馮承鈞注本、台湾商務印書館本が流布本で便利〕コーチンの王は熱烈な仏教徒だったと云っている。J.R.A.S.1896, p.342)

気候は温かく寒い冬季はないのである。米、麻、大豆、小麦、粟、芋、野菜類は充分に供給されていて、豊富にして簾価である。

彼らは白銀を切って貨幣に利用し、貨幣の面に公印を捺している。これらの貨幣は文易の際に使用される。この地の産物は真珠、あらゆる彩色からなる番布、それに兜羅綿（木綿布）である。（注6　この綿布は恐らくマルコ・ポーロの云っている蜘蛛の巣の糸のように見えるバックラム（のりで固めた亜麻布）でもあろう。ユール大佐は「マルコ・ポーロ紀行訳注本」のそれについて、有名なMasutipatam のモスリン布だったろうと云う。Yule:Ma.Polo, II.p.348.Couf infra, pt, II.ch, XXIII)

馮承鈞校注、「諸蕃志校注」（史地叢書）の南毗国の条に

南毗国（注一　此の南毗国は訳注に考察して今の Malabor に作っている。西域記の巻十秣羅矩托(Malakuta) 国である。その国に秣剌邪（Malaya）山があるので、後に其の地を山の名でもって呼んだので、Malayavara 阿剌壁語で訛って Malaya-bar といっている。これが現在呼んでいる名前の由来である。本條の後に諸属国の名を列記しているが、そのうち南は故臨 Quilon に至り、北は甘琵逸 Cambay に抵る間を完全にインドの西岸まで包括していて、殆んど十一世紀初年には摩訶剌陀 Maharastra、遮婁其 Calukya

朝の盛期のこととしている。然し、十三世紀の時にになると、国勢が衰微して属国は各々分立していた。「嶺外代答」巻三の大食諸国の条のなかに麻離抜国があって、或は麻囉抜国とあるのが即ちその国である。ところが「諸蕃志」ではこれを麻離抜と名付けていないで、むしろ南毗国と名付けている。殆んど南毗の国の地を勢力のある婆羅門部落の名をその国の名としている。旧考によると、南毗を Nair と宛てていることもあるし、Nambi を南毗とするのもあり、ペリオは最近の説で南毗を後説の Nambari としている。此の南毗は瀛涯勝覧では柯枝 Cochin、古里 Calicut の両条の記述中に南毘に作っている。本書諸蕃志巻下の胡椒の条の注記に南毗とあって離抜国とはなっていない。即ちこの国の本名である。わたくしの訳本、〝マルコ・ポーロ行紀〟第一七七章馬里八児国の条を参照のこと。）は西南の極に位置し、三佛齊より風を利用して一ヶ月余りかかって到達できる。国の首都は蔑阿抹と名付けているが、唐語に訳すると禮司という意味である。（注2　この首都の名蔑阿株は、訳注に謂う属国の中の麻哩抹に相当する。巻下の胡椒の条の注記、無離抜かそれで、Malaba の訳名であるとしている。然しながらその音義と原名とはいづれも合致していないので、恐らく書写伝流している内に訛誤を犯したのではあるまいか。そもそも、馬八児 Maabar を Malabar の国名となすといった誤りもある。）その君主は裸体で跣足である。頭を紐で縛り、腰を覆うのに皆白布を用いていて、或る場合には白布窄袖の衫を着たりする。外出の場合には象に騎り、金製の帽子をかぶり、その冠帽は真珠、珍宝を以ってその上に施飾し、臂には金の釧をかけ、足の所には金環をまとっている。その儀仗は華麗であって孔雀の羽根を用いて装飾とし、傘の柄に銀朱を施してある。その儀仗兵は大略二十人余りで、王の左右に護衛兵として侍している。それに異国出身の婦人たちが扈従し、それに選ばれるのは面貌が美しく、しかも身体が立派で雄偉な者である。前後に約五百余人程いて、前の方は舞踊しながら先導し、いづれも裸体で跣足で腰に布をまとい着けている。後方は騎馬姿で鞍はなくて裸馬に乗り、腰に布

をまとい髪は束髪である。真珠を用いて瓔珞とし、真物の金糸で錬を造ってつけている。香水には龍脳・麝香その他の香薬料を用いて身体に塗り、それに毛雀、毛傘で覆っている。その他の扈従者は官吏たちで白色の異国産の布（白蕃布）を用いて袋とし、その上に座る轎を用い、布袋轎と名付け、これを扛舁するやり方である。扛は金銀の箔で包み飾り、この布袋轎は舞姫たちの前に居る順になっている。この国は沙池が多くて、王が出遊する場合に、先導として官吏一人と兵卒百人を派遣して、水をまいて地を湿らせ、風が激しく吹いて沙塵を巻上げるのを予防している。飲食の種類は精細であって、容器の鼎だけでも百個程あり、日に一つずつ代えてゆく。官名で翰林というのがあるが、王に飲食を供する場合に、その食事の量の多寡を視て、毎にこれを検討吟味して過度の量食に陥らないようにする。時として王様が病気にでもかゝろうものなら、王の糞を嘗めて甘苦に従って療治に資すると云う。国人の皮膚の色は紫色で、耳輪は大きく肩に垂れているし、弓矢の射技を習い刀や矟を善く使い、戦斗するのを好んでいる。征伐の際は戦斗象軍に乗り、敵に臨むのに当って、彩色のある纈製で頭部を飾り佛教を崇拝して謹直である。（注3　訳注によると、本書に記している佛は、これ必ずしも佛教の佛を意味しているのではなくて、蓋し一切の金色像を漠然と指しているようである。例えば大秦国の条のなかに〝誦経禮佛〟と云った言葉が見えているし、大食国の条にも佛、名づけて麻霞勿とあったりする。渤泥の条にも〝佛に遇うた折には其の王が親しく花果を供えること三日〟と云ってあるのも、いづれも金色像を指しているのである。）

この地は温暖で寒季はない。米、穀、麻、豆、麥、粟、菜、芋を食用とし充分足りているし、亦その値段も安く安定している。白銀の混りを銭貨に用い、それに刻印鏤刻して官印を捺してある。国民は貿易通商に従事している。土地の産物は真珠、諸々の彩色の番布、兜羅綿などである。〕

〔本文〕蓋俗、所謂種羊毛織成也

〔口訳〕けだし、俗に謂うところの羊毛種を地中に植えた上で織り成したものと云っているのを指すのである。

〔王観堂先生の注記に曰く〕史記、大宛列伝正義によると、宋膺の異物志を引いて次の様に云っている。〝大秦の北に小さな邑村が付属している。この地では羊羔（ひつじこひつじ）が自然に土中のなかに発生して、草木が萌えようとする候になると、墻を築いて、その周囲をぐるぐる繞らせ、その獣たちの食用になるものを供給している。その羊羔の臍が地面と連結していて、その臍を絶ち切るとすぐに死んでしまう。物を叩き撃ってこの動物を驚ろかすと、遂に臍の緒が絶ち切れてしまう。そこで水草を逐うて群れをなして放牧できるようになる。新旧の唐書にみる佛菻伝及び唐会要も同じく此の説を踏襲しているし、劉郁の〝西使記〟にも壠の種羊は西海に産出し、羊の臍を土中に埋め播いて、水をかけて潅漑すると、雷鳴を聞いた時に臍が地中から生えてきて、それが長く莚びるに及び生長してくる。その雷鳴に驚いた時に木で臍の緒を断切する。すると草を自分に噛めるようになるので、秋季になると羊が食べられるようになる。臍の内に種子がある云々…〟亦「異物志」が説くところも略同じ内容である。湛然居士文集巻六の西域河中の雑詠に次のように云っている。〝無衣壠種羊〟と。又同じ巻き十二に、高善長に贈る一百韻にも、〝西方好風土、大率無蠶桑、家家植木緜、是為壠種羊〟と。是の壠種羊はすなわち木綿の別名であることがわかる。また劉郁の「西使記」の説は因襲によって記述しているのであって、依拠するに足らないと思われる。劉郁の「北使記」には次のように云っている。即ちその衣服や蒲団、茵幙（しとねまく）は悉く羊毳で造られていると。その所謂毳を地面に植えて育成するというのは誤りであって、「西使記」の記述と同じ誤謬を侵しているのである。

（未完）

Summary

Ch‘ang-Ch‘un’s長春眞人 Hsiyuchi 西遊記

Translation into Japanese and Annotation by Jiro SUGIYAMA

(Sequel)

SUGIYAMA Jiro

The Hsiyuchi is an important and interesting record of the journey made in the 13th century by Ch‘ang-Ch‘un, a Taoist master famous for his wisdom and sanctity. Ch‘ang-Ch‘un was obliged to follow and advise the Mongol Emperor Chinghis khan during his military expedition in Western Asia. The journey lasted three years (1221-1224).

The Hsiyuchi was not written by Ch‘ang-Ch‘un himself, but by Li chi-ch'ang 李　志常, one of his disciples, who accompanied him and kept a diary of the journey. I used for my translation late Professor Wang kuo-wei's 王　國維 excellent annotated edition. In 2002, I published the first part of my annotated translation as a separate volume in our college's series.

The contribution in this issue of the Journal represents the sequel of the translation.

Professor,
International College
for Advanced Buddhist Studies